明治卅六年四月五日第三種郵便物認可　毎月一回一日發行

家庭雜誌

第四卷

第三號

明治三十九年三月一日發行

Dai 4 Kan.　KATEI ZASSHI　Dai 3 Gō.

由分社

東京市麴町區元園町壹丁目廿七番地



最新化粧料皮膚有効
ブリアンチン
薬學博士
下山先生御證明
皮膚病專門獨逸ドクトル
加藤先生御證明
此ブリアンチンは両専門大家御證明の如く適當なる原料を配伍し且つ高等の香料を加合したる最新化粧料にして皮膚衛生上及び交際塲裏には必要欠くべからざるものなり世の夫人令嬢方速に用ゐて其眞價を知り玉へ
用法
ブリアンチンは湯より上りたるとき。顔を洗ひたるとき。水おつかひたるとき。おしろいをつけるとき。手のひらにてぬるべし
又おしろい下としてはブリアンチンにまさるものなし
定價
大瓶 貳拾八錢
小瓶 拾五錢
特別(御進物用)参拾五錢
發賣元 東京市京橋區南紺屋町 三光堂
電話新橋四〇二三番

(大國社意匠)

第五回内國勸業博覽會銅牌及褒賞狀受領

●壽美禮おしろい

●壽美禮おしろい 煉り製 定價 大壜 二十錢 小壜 十二錢 水製 定價 大壜 中壜 小壜 二十五錢 十五錢 十錢

グワイオレット水製

登録商標

壽美禮おしろい

五二會品評會功勞銅牌

THE BEST MADE
SUMIRE
VIOLET PASTE





錫栓附乳白硝子壜入

すみれ白粉は
菫おしろいは
壽美禮白粉は

歐米諸國に専ら流行する香料及弊店特製の化學的炭水素の新成蹟體等を以て調製しあるを以て總てを艶麗ならしめ芳香馥郁として長時間保續するの特性あり芳香馥郁と長く保つが故宴會觀席雜踏の場所に衛生上良好の逸品なり高等優美にして意匠も美妙なれば御進物に最も適當す方今東京横濱に於て上流社會に益々好評を博しつゝ流行せり

●皮膚艶白劑●壽美禮あらい粉

●綠、藍、紅彩蝶番ひボックス入三錢 鑵詰 六錢五厘 袋入 壹錢

●弊舗製造の壽美禮洗粉の義は方今歐米諸國に専ら賞賛する香料及弊店新製の原料を用ひて製せしものなれは朝夕此洗粉を御用ひ給へば能くあかを落し御肌を美しくなす

●常に髮洗ひに用ひ給へば髮のねばりを取り油あか等を生せず又半襟ハンカチーフ絹綿等に用ひて能く汚垢を落す總て物を染白する性あり

●使用法は普通あらひ粉の半分にて能し水又は温湯に溶し又はぬかに混せ入浴の際用ふるを良とす

登録商標

SUMIRE
Washing Powder

壽美禮あらい粉



製造本舗

東京東兩國
(兩國橋際)元町

伊勢吉壽美禮堂謹製

販賣所は全國到る處小間物店化粧品店賣藥店其他各勸工場各劇場運動場に有り

産科
婦人科
朝長鷹二郎

横濱市眞砂町二丁目廿六番地

診察每日午前

磯部

日本橋濱町三の一

診察

外科皮膚病
梅毒痔痳

中の橋通り東入

午前

檢三

此清心丹は全國到る所にあり

ニッケル鑵入にてポケット用に適す



旅行又は平常携帯に便利也

輕便 **瓦斯の煮燒** 德用

瓦斯は燈火用の外料理其他一般の煮燒用として使用は輕便マッチ一本あれば晝夜何時にても即時に用を便じ火力加減自在にして火災の危險なく且大に手を省き費用は薪炭よりも低廉なり

○三升の米は瓦斯代僅に一錢七厘時間十六分にて炊くを得べし

○瓦斯竈は本社の發明品にて專賣特許を得たるものにして瓦斯消費量少なく德用便利也

○工事費は前金拂は一割引とし又月賦拂にて約定す

○臺所竈、七輪、湯沸、風呂並煖爐等に專用の瓦斯代は特に定價の二割引とす

尙各種式新器具は當社構内陳列所又は銀座陳列所さへ陳列縦覽に供居候御立寄御一覽被下度候



東京神田錦町 **東京瓦斯株式會社**



家庭雜誌

第四卷第三號

明治三十九年三月一日發行



僕の夢

堺利彦

遙かに雪を戴いた富士が見えて、前には奇麗な水の石川が流れて、後には鬱蒼たる杉や檜の森があつて、土地は自然に緩かな勾配をなして居る山畑の一町ばかり。麥と菜の花とが青と黄の毛氈を敷きつめて居る其の間に、洋風を交へた萱葺の家の廻り一反ほど、赤や紫、草花の數々が一面に植ゑつられて、犬、鷄なんども其處此處を歩いて居て、牛も一疋彼方の柿の木の下に立つて居て、今しも夕日の光が漸く薄れて、白い片われ月が中天に懸つて居るといふ樣な光景の間に、屋外の長椅子の上に横たはつて、新鮮の大氣を自由に呼吸しながら、氣に入つた文學の書物でも讀んで見たい。こんな事が僕の夢だ。

婦人と經濟的平等

堺利彦譯

△是はベラミー氏の著「イクオリチー」（平等）と題する小說の一節であります。此の小說は、別に小生が譯したる「百年後の新社會」の續き物語で、其の全體の趣向を一口に云ふと、西野といふ人が睡眠術にかゝつて百年ばかり寢てしまひ、目がさめて見たれば、其の間に大革命が起つて、世の中は全く變つたものになつて居たので、ビックリしながら熱心に此の新社會の組織を聞き、昔の社會と比較して其の進步に驚くと云ふ話です。それで此の一節は、西野が井土といふ醫士と二人で、婦人の地位に就て語つて居る所です。そして西野の自叙體になつて居ります。猶ほ前號の豫告に「新社會の婦人の地位」といふ題を掲げたのは、少し題の選び方がマヅかつたので、それを改めて「婦人と經濟的平等」にしたのであります。

予曰く「井土先生、私はそう思ひますよ。百年間眠つて此の新社會を見た者が男の私でなくて、若し是が婦人であつたら、一層面白かつたらうと思ひますよ。何故ならば、此の社會の經濟的平等の結果は、男子よりも婦人の上に大變化を來して居るのですもの」

井土先生曰く「如何にも其の通り。此の社會に經濟的平等が行はれた爲に、婦人が得た所の利益幸福は、迚も男子と比べものになりません。昔の男子の多數は

金持の奴隷であつたが、昔の婦人は、金持でも、貧乏人でも、悉く男子の奴隷であつたのです。即ち昔の婦人は大抵、奴隷の奴隷であつたのです。男子は如何に貧乏の底に在つても、猶は一二の婦人を自分の心のまゝに追使ふ事が出來たのですが、婦人は此の社會の幾層も幾層も重なりあつて居る其の底に、あらゆる重荷を脊負つて立つて居たのです。然るに彼の大革命は、婦人を男子と平等の地位に引上げたのみならず、道德上に於ても、物質上に於ても、男女共に更に數等の高さに進ましめたのだもの。男子の爲には革命は只だ向上であつたが、婦人の爲には殆んど生れ變つた新生涯と云つても善いのです」

予「尤も、昔でも、金持の婦人は別にひどい目に會つて居たと云ふ譯でもありませんがね」

先生「然し、其の金持の婦人といふのは數に於て幾らもありますまい。一般に婦人の地位を論ずる場合には、殆んど云ふに足らぬ少數でせう。それに、我々から見ると、其の昔の金持の婦人といふものゝ境遇が、

決して有がたいとは思はれませんね。そりや成程、體を苦める様な辛い事は無かつたでせう。然し、其代り、丁度甘やかされた子供と同じ様に、さん〴〵男の玩弄にしられて、妙なグニヤ〳〵した者になつて居たのでせう。我々はそんな婦人を決して望ましい者とは思ひません。昔の物語本や書などに依つて想像するに、昔の金持の婦人は全く世辭や追從の温室の中に住んで居たのですね。其の結果は、道德の上にも、智力の上にも、却つて貧乏人の女に劣る事になつたのでせう。若し今日の婦人が、是非とも其の社會に立戻らねばならぬ事になつたとするならば、謂はゆる交際社會の貴婦人となるよりも、寧ろ勞働社會の婦人を望むでせう。昔の社會で最も多く女性の墮落を示して居る者は、後者でなくて寧ろ前者にあるのですよ」

予も實際そう感じて居た事があるので、敢て井上先生の説を駁する事も出來なかつた。

先生又曰く『然し、其頃もう既に謂はゆる婦人運動が起つて居たでせう。あなたも何處かで其の運動の卒

先者たる輝き婦人を見た事があるでせう」

予『あります、あります。女權擴張とか云つて大分騒いで居ました。然し、其の主張は只だ選擧權を要求するとか、婦人の保護に關して二三の法律を改正するとか云ふので、別に革命的のものぢやありませんでした」

先生『成程、そうでせう。婦人の獨立運動も矢張り他の革命運動と同じ道順を踏んで來たのです。即ち、最初は眞の目的が明かに見えなかつたのです。婦人問題は勞働問題と同じく、其根底が經濟組織に在るといふ事が、まだ明かに見えなかつたのです。男子が女子を壓抑して居たのは、金持が貧乏人を壓抑して居たのと、實は全く同じ事です。故に婦人の地位の改善を計るには、矢張り富の分配を公平にするの外は無かつたのです。富の分配を公平にして、此の社會に經濟上の平等を作れば、金持と貧乏人との爭ひは忽ちにして純乎たる同胞の親睦と變じ、男子と女子との爭ひは忽ちにして純乎たる夫婦の愛情と化するのです。

『然るに、彼の婦人運動の卒先者には、まだ此の道理が善く分らなかつたので、婦人の地位の低いのは畢竟男子がイケナイからだと思ひ、之を改善するには男子の道徳を高めさせるより外は無いと思て居たのです。然し、それは大きな間違で、何も男子が必ずしも甚だしく女子よりイケナイ譯では無い。金持と貧乏人との關係も之に同じで、何も金持が必ずしも甚だしく貧乏人より悪い譯ではない。地を代ふれば皆な然りで、誰でも其の地位に立てば止むを得なかつたのです。そこで此の男女貧富の不平等を生じた原因は、其人に在つたのではなくて、其組織に在つたのです。或者が他人の上に權力を占むれば、上なる者が專横となり、下なる者が卑屈となるは當然です。人間の道徳的關係は平等の外にありません。故に、男子が女子を虐待し、資本家が勞働者を酷遇する事を改めようとするならば、男子と女子と、資本家と勞働者と、皆な其の經濟上の地位を平等にするより外に法は無かつたのです。然るに此の根原を改めようとはせずに、只だ其の結果たる

不平等を幾ら攻撃して見た所で、効果の得られる筈が無いのです。

『當時、婦人運動の卒先者が、禁酒運動などに熱心したのも、彼等が姑息の考へを持つて居た事を示す一つの證據ですね。彼等の考へでは、男が酒を飮まなかつたら、屹度今の樣な惡徳は働かないだらうし、そうすれば、經濟上からも、道徳上からも、婦人は大きに幸福の身の上となると、斯う思つて居たのでせう。是は即ち、彼等が仕ふる御主人の道徳を改善して、現在よりも少し善く待遇して貰はうと云ふに過ぎなかつたのです。其の主人なる者を全廢しようといふ考へは、まだ浮かんで居なかつたのです。

『又、當時、婦人が法律に依つて男子の飲酒を禁じて貰はうとした事が、即ち當時に於ける婦人の地位を示して居るのです。若し今日、男子間に於て、婦人に不利不便を與ふる樣な習慣があるとするならば、婦人は何も法律に依つて之を改めようとは仕ない。婦人は何も他の力を借りて之を改めようとは仕ない。婦人は經

濟上に於て全然男子から獨立して居るので、直ちに自己の力を以て男子を屈服させる事が出來る。即ち婦人は只だ其樣な男子を擯斥すれば善いのである。其樣な男子の手を取ることを拒絶すれば善いのである。然し、西野さん、あなたの時代では、婦人がそんな態度を以て自己の品位を保つといふ事は到底出來なかつたのでせう。その當時では、婦人は經濟上から結婚の必要があつたので、相手の男など撰んで居る暇は無かつたでせう。そしてモウ一たび結婚した以上は、自分の衣食を夫に供給して貰ふ代りに、何でも夫の云ふなり次第になるといふのが、不言の約束であつたのでせう。』

予『イヤそう仰しやると何だか餘り酷く聞えますが、實際そうばかりでもありませんでした。男子の中にも隨分善く譯の分つた人もありましたし、婦人の中にも一家の全權を握つて居た樣な人もありました。

先生『成程、成程。そりや如何なる奴隷制にもある現象ですよ。主人の權力は絕對無限とは云ふもの丶、實際には常に多少の人情を加味して居るのです。そし

て其の奴僕の中にエライ人物が出た時には、却つてそれが實權を握る事は善くある例です。然しそんな事があるからとて、主從の關係を善い制度だと云ふ譯には行きますまい。尤も、昔の主從制度、階級制度も、今我々が思ふほど堪へられぬものでは無かつたでせう。喩へば、北極にも、熱帶にも、我々の體が堪へ得る如く、恐ろしい無理な社會組織の下にも、人情の花は又それ相應に咲いて居たのでせうよ』

＊　＊　＊　＊　＊　＊

井土先生更に曰く『善く考へて見ると、婦人は彼の大革命に對して、何ほど感謝して善いか知れませんね。婦人が昔の社會から嵌められて居た足枷は實に三重であつたのです。第一は、多數の婦人が多數の男子と同じく、富豪の爲に縛られて居たもの。第二は、婦人が一身を任せた其の男子に縛られて居たもの。第三は、婦人が其の道德上、及び智力上に於て、一般社會から縛られて居たものです。

『此の第三の足枷は最も嚴しかつたもので、凡そ婦人

たる者は、其の思想も、其の言語も、其の行動も、悉く一定の奴隷式に嵌めこまれて、あらゆる習慣、仕來り、言傳へに服從させられ、少しの見識も、少しの自由も許されず、身心ふたつながら男子制定の型に入れられてしまつたのです。そして其の結果は、殆んど全く婦人の心の働きを止めてしまつて、遂に男子をして「女子は天性男子に劣れり、故に男子に服從せざる可らず」と言はしめる樣になつてしまつた。そしてそれが尤もらしく聞える樣になつた。然るに、其實を云へば婦人が無智であるから男子に服從せねばならぬのでは無くて、男子が婦人を壓伏するから婦人が無智になつたのです。彼の婦人の作法、躾、心得など、稱する奴隷法とも云ふべき者に、何ゆゑ婦人が從はねばならぬかと云ふに、それは婦人が其の生涯を安樂に送る爲に、或男子のお氣に入らねばならぬからです。昔の世では、男子でも、人に雇はれようとするには、其の思想行爲に於て、其の雇つて與れる人の氣に逆らはぬ樣にする必要があつたでせう。尤も、雇主と雇はれ人と

の間では、其の勞働を賣ると買ふとの關係であるから、雇主たる者も、直接自分に反抗せぬ限りは、多少雇はれ人の思想行爲の自由を許さぬでは無いが、男女の關係は又大いに違ふ所がある。婦人は實に男子のお氣に入で無ければならぬ。男子の心を得んが爲には、婦人は常に男子の爲に心持よき者で無ければならぬ。そして其の意見や行ひに依つて、男子の趣味や、男子の偏見に逆つてはならぬ。さも無ければ、男子は何時外の婦人を連れて來るか知れぬ。そこで昔の教育法は、男の子には成人の後に生活の道の得られる樣に、女の子には男の氣に入る樣に、男の氣に逆らはぬ樣にと、そればかり勉めたものです。

『若しそれが或婦人を或男子の趣味に適する樣に教育すると云ふのであつたら、（婦人の威嚴といふ點から云へば同じく不都合には相違ないけれど）、兎にかく其の結果はまだしも善かつたでせう。なぜならば、男子の中には、獨立の意見を持つた、見識の高い婦人を喜ぶ者もあるのだから、そんな男の爲には矢張りシツカ

りした婦人を養成する事になつて居る筈です。然るに、どんな男子がどんな婦人を養ふ事になるか、初から知れて居らぬので、積極的に或男子の氣に入る樣にと巧むよりは、寧ろ消極的に、普通男子の愚見に逆らはぬ樣にして置くのが、一番安全な方法となつた。そこで女子敎育の理想は、思想に於ても、言語に於ても、動作に於ても、總て一般普通、仕來り、言傳へのまゝで、お定まりの習慣に從ふ事になつたのです。故に婦人たる者が、何につけても、新しい說とか、自分の意見とかを持つことは大の禁物で、殊に宗敎、政治、其他社會上の事に就て、少しでも目に立つ樣な行ひをする事は極めて不都合となつて居りました。つまり婦人は何につけても世間並でなくてはならぬので、結婚して安樂を得ようとするならば、縫針の事か、座敷の裝飾の事かの外は、兎かく何事につけても、意見だの、說だのと云ふ者を持つて居ては駄目でありました。どうです西野さん、其の通りでしたらう」

予「如何にも其の通りです。昔の女子敎育の精神は

實にあなたの仰る通りでした。然し、それでも又、中には隨分シツカリした、見識の高い、自由な思想を持つた婦人もありましたよ」

先生「そりや勿論ありましたらうよ。今日の新婦人の前驅がチラホラとありましたらうよ。つまり其の人達は、女の足枷を踏み切つて、婦人にも男子と同じ思考力、活動力の在る事を、世の眼前に見せたのですね。それで力の強い者は、其の通りにして足枷をも踏切つたでせうが、大多數の婦人は只だ其の境遇次第になつて、いつまでもウジ〳〵として居たのです。そして此樣な婦人が次の時代の男子の母となつて、又どのくらゐ世の進歩を妨げたか知れません。それを思ふと、私は彼の大革命に對して、どこまで感謝して善いか分らない樣な氣がするのです」

* * * * * * *

井土先生は又更に曰く「私は先刻、あなたの時代に於ける勞働問題と婦人問題との類似、即ち勞働者の境遇と婦人の境遇との似てゐる事を話したが、其の關係

を更にこんな方面から見ると一層明白に分るでせう。『資本家が常に自由に勞働者を切り從へる事の出來たのは、何時でも無職業の勞働者が澤山にあつて、どんな賃銀でゞも、どんな條件でゞも、喜んで雇はれようと仕たからでせう。それと同じに、あなたの時代には婦人の無職業者、即ち獨身者が澤山にあつたので、婦人は常に容易に男子に切り從へられて居たのです。多數の男子が衣食に窮する場合には、固より妻子を養ふ事は出來ぬので、據どころなく獨身生活をする。處が、男子が結婚せぬのは只だ幸福を得ぬと云ふ丈であるが、婦人が結婚せぬのは其外に衣食の道を失ふのである。婦人が獨力で食つて行かうとするのは、男子よりも更に六かしい。そこで勢ひ婦人間に、どうかして早く結婚しようと云ふ競爭が起る。此の競爭があるから、男子は如何なる條件でゞも婦人を切り從へる事が出來たのである。

『處が、婦人の屈辱はまだそれ丈に止まらぬ。更に恐ろしき競爭が起つて來た。即ち、人の妻といふ名譽あ

る條件に依つて男子に養はれる事も、到底その望が無いので、遂に只だ一塊のパンの爲に其身を賣る、淺ましの婦人が生じて來た。どうです西野さん、あなたの時代の、謂はゆる十九世紀の文明は、斯くの如く男女關係を傷うて居たのです』

予『それに就ては、昔の道德家や、宗敎家なども隨分苦心したもので、醜業婦問題などゝ云つて色々に研究もした樣です。然し、是も經濟上の問題とした事は餘り聞かなかつた樣で、何分にも是は人心の腐敗より來る現象であるから、道德宗敎の力に依つて之を救濟せねばならぬと、論じられて居た樣です』

先生『そう〳〵、その事は私も善く知つて居ます。あなたの時代では、社會の經濟組織が根本からイケナイのだと云ふ譯に行かないので、何でも大抵の惡事は、此人心の元來醜惡なる結果だとせられて居たのです。現在、飢に迫られたる幾百萬の婦人が、其肉を賣つて男子の慾望を充すより外にパンを得る道の無い時に、只だ說敎ばかりして此の賣淫といふ大害惡を救ひ得る

と考へたとは、隨分おめでたい話ぢやありませんか。私は是で少し骨相學をやつて居るので、昔の道德家や宗教家が、こんな馬鹿々々しい事を若し眞實に考へて居たとするならば、其の腦髓の解剖がして見たいと思ひましたよ」

予『それから昔し私の時代でさへ、氣の强い婦人は、結婚して夫の姓を名乘ることに反對して居ましたが、今はそんな事はどうなつて居ますか』

先生『女の名も男の名も、結婚の爲に何等の變化も受けませんよ」

予『そうですか。それにしても生れた子供の名は』

先生『それには新しい習慣が出來て居りますよ。例へば、父の名が松本菊太郎で、母の名が福井雪尾であるならば、其の娘は福井菊枝、其の息子は松本雪之助など丶名乘るのです。つまり女の子は母の姓と父の名とを組合はせ、男の子は父の姓と母の名とを組合はせて、それに又何か少し特別の者を加へて、それを自分の名とするのです」

予『次に私には斯う思はれますが、實際どうですか。婦人が經濟上の獨立を得た結果、男女間の道德の標準に、必ず多少の變化を來したであらうと思はれますが」

先生『イヤそれは、變化を來したと云ふよりは、男女間に經濟上の平等が生じたので、初めて男女が道德的關係を生じたと云つた方が適切でせう。何事に限らず、凡そ倫理的行爲には、その行爲者の自由といふ事が第一の要件でせう。然るに、昔では、婦人が經濟的に男子に從屬して居たのですから、夫婦關係に於て婦人は自由の行爲を取る事が出來ず、從つて其の關係に倫理道德の意義は無かつたと云つて善いのです」

予『成程。然し、先生のそう仰る所を若し昔の道德家に聞かせたなら、さぞ驚く事でせう。我々の時代には、あれでも色々と嚴重な、男女間の規律があつたのですから」

先生『そりや勿論ですよ。然し、こりや餘程おもしろい問題だから善く考へて見て下さい。如何にもあな

たの仰る通り、あなたの時代には、男女間の關係に就て色々嚴重な規律があつたでせう。殊に婦人に就て多くあつたでせう。然し、其の規律の根底は、大概の場合、倫理道德では無くて、只だ注意用心に過ぎなかつたのでせう。即ち、其の目的は、婦人の經濟的利益を防衛するに在つたのでせう。婦人が經濟上、從屬の地位に在つた時代に於ては、婦人は此の嚴重な規律に依つて、纔かに男子の橫暴を免れて、其の一身と其の子供とを保護する事が出來たのです。それで其の規律は、其の時代に於て、勿論大いに價値ある者であつたに相違ないが、其の成立を深く探つて見る時には、それは決して男女關係の神聖の爲に起つて來たのではなく、單に其の經濟的の結果を慮んばかつた損得勘定から來たのです。故に之を倫理とか道德とか名づけるのは、言語の用法が甚だ不精密だと云はねばなりますまい。あれは寧ろ男女間の經濟法則とした方が適切でせう。

『昔の結婚の約束といふものは、色々と感情や宗教の縫箔で飾られては居たもの〻、法律の眼中に於ても、

社會一般の認むる所に於ても、其の實質は正に純然たる經濟上の取引であつたことは、あなたも善く御存知でせう。即ち、男子は其の婦人と及び其の婦人の腹に生るべき子供とを養ふ事、その代り婦人は其の一身を投出して其男に從ふ事。換言すれば、婦人は男子の財產に對して要求權を有するを條件として、自ら其の財產の一部となつたのです。そこで、法律なり、社會の批判者なりが、或る男女關係の道德的なるか不道德的なるか、純潔なるか不潔なるか、を定むるには、只だ其の取引が法定の形式に合して居たか否かと云ふに在るのです。それさへチャンと整へられ〻ば、それ以前には惡事として、醜行として排斥せられた事も、悉く正當となり、淸潔となるのです。結婚するに不適當な者であらうが、親となるに不適當なものであらうが、そんな事は構ひません。如何に下劣なる動機から來たものでも、そんな事は構ひません。忌で忌で堪らぬ男を無理おしつけに押しつけられたのでも構ひません。蕾の花がムザ〱と老耄爺の犧牲になるのでも構ひませ

ん。只だ其の契約が合法的にさへ取結ばれてあれば、總て其他の事は清く美しき者となるのです。之に反し、若し其の法律上の手續を濟ませずして、或る婦人が其の戀人と會ふならば、其の戀は如何に強くとも、其の關係は如何に似合はしくとも、其の婦人は不潔、不義、墮落の人として排斥せられ、生きながら恥辱の中に葬むられてしまふのです。それで私は繰返して云ふ。是も亦た當時に在つては、婦人の經濟的利益を保護せんが爲に、實に必要な法則であつたのでせう。然し之を男女關係の倫理とか道德とか云ふのは實に不都合な用語です。實を云へば、此の法則は、婦人の物質的利益を保護せんが爲に、敢て人情の法則を破つたものであるのです。

『それから當時の記錄に依ると、男女關係の道德律に、男子用のと婦人用のと二種類あつて、男子は女子用の法律に縛られる事を拒んで居た樣ですね。そして或る一律論者は、之を攻擊して、善惡美醜の標準は只だ一つであるべき筈だ、男女に依つて道德を異にする

は不都合だと、憤慨して居た樣ですね。そりや勿論、道德の標準が二つあるべき筈は無い。一律論者の憤慨は尤もです。然し、あの社會組織の下に於て、よしや男子が婦人用の道德に從つたとした處で、それが人類社會の道德の爲に何程の益を爲したでせうか。元々、男女の愛情の爲に何等の値もなき其の道德律が、假令男子の上にも行はれたとした處で、何の有がたい事も無い筈です。眞に人間の良心より發したる、男女共通の、高尙なる道德律は、只だ男女が絕對に平等の地位に獨立して、互に其の性的關係を結ぶ時にのみ、初めて現はれて來るのです』

予『成程、善く分りました。最初はどうも先生のお話が餘り酷いとも思ひましたが、善く考へて見ると、其の詩人や小說家や諷刺家も、それと同じ事を云つて居たのです。即ち當時の小說や、脚本や、詩歌の大部分は、皆な此の男女關係に對する世俗の道德と眞の戀愛の本能的要求との矛盾衝突を、其の根本の意義として居たのです』

先生「そうです、そうです。あなたの時代の文人が、此の鐵の如く冷酷なる道德律、殊に婦人に對して殘忍暴戾を極めたる此の道德律の、不義、不正を剔抉した事は、實に非常な勢ひでしたね。そして其の爲には、隨分世上に之を憤るの情も湧き立つた樣でしたが、惜いかな、遂に著しい効果を見る事が出來なかつた。何故といふに、彼等は其の道德律の依つて生じたる根本の事實を指摘しなかつたからである。根本の事實とは即ち富の分配法で、婦人が其の身を賣つて、生活上に男子の保護を受けねばならぬに至つた、其の社會組織です。其の文人が之を覺らずに、此の社會組織を改め、此の富の分配を改める事を說かなかつたので、折角の骨折も遂に著しい効果を得なかつたのは、實に惜むべき事でした」

予「段々承けたまはつて十分に得心いたしました。そうすると何でしたらうね、廿世紀の婦人が漸く此の道理に目を醒して、革命が如何に婦人の爲に多大の利益幸福を來すべきかを覺つた時に、定めて男子よりも

一層熱心に其の爲に働いた事でせうね」

先生『そうでしたよ。實にそうでしたよ。尤も、永い間の習慣の惰力で、殊に數千萬年の間に養はれた怯懦心の爲に、多數の婦人は兎かく十分に此の道理を覺らず、はか〴〵しい運動も出來なかつたが、それでも世が愈よ進んで來て、眞に經濟的平等の値が分つた時に、彼等は殆んど一齊に革命運動に投じて、眞に目ざましい働きを仕ましたよ。男子の方では、其の當時の身分次第で、新社會の經濟的平等を望まぬ者もあつたが、婦人の方では、苟くも其の道理さへ會得すれば、一人として之を望まぬ者は無かつたのです」

「經濟的平等」は即ち社會主義の理想である。之を得るには「土地資本の公有」を行ふの外は無い。（堺生附記）

春雨日記

ふかな生

ふしどの中の朝心地、此頃は得も言ひ知らず懐かしくなりぬ。夜の間やうやく短かうなりゆけば、見はてぬ夢のこり惜う、東の空の早くも白みわたりて、曉鴉の聲うつゝの耳にひゞく。となりの時計は發條や弛みけむ力なげに七つばかり打ちぬ。うつら〳〵、起き出でむか、出でざらむかと、思ふが如く思はぬが如く枕の上に身じろげば、心なの汽笛いづこよりかけたたましう響き來りて、起きよ〳〵いざ起きよと、つれなくも我を促がすめり。春眠曉をおぼえず、一宵の價千金と聞きつるものを、さては思ひやり無き笛の音のうらめしさよと、まだ醒めやらぬ眼を擦り〳〵、起ちて雨戸を排くれば、實にや、ぬる風の我が庭なる柳の枝に、しと〳〵と細き雨を送れるにぞありける。

殘れる雪、遲れし氷、この雨にうたれて見る影もなくなりぬ。朝餉せむと一室に集へば、人々口々に『早

や春雨の降り出でゝ』といひさわぐに、われ少なからず興を催はして、思はずも、『春雨にしーッぽり濡るゝ鶯の』と口ずさめば、一座爲めにドッと笑ふ。色黑き無骨男の、こんなもの知つてゐやう筈なしとの心なるべし。『侮辱も人にこそよれ』と、力むで見たところで詮方も無きこと也。

色黑しとて、音樂趣味の解せぬといふ諺もなき世なり。我輩とても、先生といはれる程の馬鹿を勤めし折は、これでも唱歌の先生と呼ばれしことありき。笑ひ給ふ御身等には、假令あしずりして悔むとも、よも此の名譽なる尊號を受くること能はじな。さては此の尊き音樂者を論らふとは、以ての外の心得ちがひ也。以後はきつと心得おかるべし。我輩とても由分社にオルガン購入の擧ありし時そを賛成したる一人にはあらずや。とは、わが苦しまぎれの辯解なり。

げに、黑き男も赤き女も、好みてよきは音樂の趣味なり。折にふれて訪ひ來る客人の、門の外よりオルガン、ピヤノ、バイオリンなどの妙なる音に迎へられて

入り來らんとき、その床しさ如何ばかりぞ。春のあした、秋の夕べ、時として處として、其が調べの宜しからぬはなく、其が奏での面白からぬはなし。樂あるときは一家こぞりて歌ひ、うれへある時は相集ひて慰む。樂器ある家は幸福を二倍にし、音樂なき家は不幸を二倍にす。千ぐさ咲き匂ふ春の園生を、歌ひて暮らす家庭にたとふれば、歌はぬ人のさびしさは、紅葉も花も辭し去りて暮れ行く秋の思ひあるべし。まして音樂は、人の心を澄まし、感情を整ふるのみならず、肺を養ふに最も適せりといへば、好む人も好まぬ人も、つとめて習ひおぼゆべき事なり。

　中等の生活を爲せる人ならんには、樂器の一つ二つ備へ得ずといふことなかるべし。簡便なるはバイオリン、十圓も出さば可なりのが手に入るべし。世には手風琴を弄ぶものあれど、あれはホンの弄ぶまでのことなり。非音樂的のケバ〳〵しき音色、まこと音樂を習はむとする者には好ましからざるのみか、音階も揃はず、音律も不完全なれば却つて害あるべし。素人の家に最

もよきはオルガン也。第一號のならば價も二十圓以内にて買ひ得べく、最も音樂的にして而もバイオリンよりは學び易く、研究の堂奥も中々深邃なれば、初め宜しく、少しく進みても宜しく、大に進まば尚ほ其の上々と興味おこりて盡くる時なかるべし。ピヤノは器樂の王とか稱せらるれど、價高ければ箇人の家庭には適せず。

　音樂趣味とともに、家庭の中に流行せしめたきは、運動趣味なり。世の大人たちが運動といふことに趣味を持たぬは、此の世を滅亡に誘ふ所以ぞといふも、言ひ過ぎたる言葉にはあらじかし。見よ、いづこの家庭いづこの一族として、胃病患者のあらぬものぞ。活潑なる運動をいやしみて、もつり〳〵と蠢めくを名譽と心得をれる『大人病』の患者が、おのれのみかは人をまで、此の『胃病』てふ恐ろしき亡國の淵に誘ふぞ、うたてくも口惜しけれ。

　されど趣味なきは、やがて其の方法なき故なり。市町村の住民は、先づ公共のために、必ず若干の運動場

を設けざるべからず。容易かるべき一手段としては、小中學校の運動場を、そのまゝ開放せしめて、生徒の居らぬ間の使用に供すべきなり。

運動の種類としては、われは先づ世人にテニスを勸めん。これならば男もよし、女もよし、老いたるも幼なきも、皆共に樂しむべく、大なる善き運動なるべし。しかも其の面白さ。やつて見ぬ中は、われも『あんな、つまらぬものを』と馬鹿にして掛りたれど、一度やつて後は、その味が忘れられず、やつて見たくて、やつて見たくて、こたえられぬくらゐ也。食はず嫌ひ、やらず貶し、は善くなき事なり。

運動に使ふ時間を無益の如く思ふ人あり。その人は如何なる時間を有益なりと思ふにか。或は讀書の時間をば然思ふなるべし。讀書、何が爲めの業ぞ、有識者たらむが爲めか。有識者たる、何が爲めの業ぞ、立身出世せむが爲めか。立身出世、何が爲めの業ぞ、幸福なる生涯を送らむが爲めか。幸福なる生涯、さらば汝は健康を無視して幸福なる生涯を送り得べしと信ずるものなるべし。あはれ。

空談こそ益なき業なれ。一家うちより、友人あひ集ひて、時をりの雜談は、實にや趣味多く、親しみもお

のづから其間に湧きて、盡きぬ樂しみはあるものから、しば〳〵の會合、しば〳〵の訪問に、むやくしき論ひ、あらぬ浮世ばなしに時をすごすは、愚かしさの極みとこそいはめ。いとまなしとて書讀まぬは、大方は此のためぞと知りて心すべき事にあらずや。

時間は勵行されたきもの也。むかしの人の今の世に生き殘れるを聞くに、時間に制せらるゝほど、心苦しきはなしと云ふ。さては、起くるも寢るも定めなく、心の行くまゝに行ひて、いつも忙はしく、いつも何をせむかと惑ひて、一生を過ごすなり。進み行く世の人としては、かくては遂に何事をも爲さで果てなむ恐れあり。讀むも書くも、出づるも入るも、一定の掟こそ新家庭には欲しけれ。

蓼喰ふ虫も好きずき。時間勵行を辛らがるものもあれば、時間不勵行を辛らがる人もあり。をかしきは人の好みなり。或る時、人々あつまりて、食ひ物の話より、何が好、彼が好と各々其の好みを言ひあへるに、正宗二合、鮨十五錢、牛肉一斤、海豚白匁、蕎麥のかけ三つなど、とり〴〵に面白きが出でたれど、中にも或る女性の、おやき三錢ばかりと言ひ出でたるが限りなく可笑しくて、一同どつと笑ひこけぬ。

反抗の聲を擧げよ

壓せられたる少き婦人を悲しびて

深尾韶

世には不仕合な女性が澤山ございますけれど、此の私くらゐ、三人も四人もの不仕合を一人で脊負つて立つたやうな、氣の毒な人がございませうか。『矛盾』の枷に縛られるのでなければ、『衝突』の軛に掣せられて、自分の意志やら他人のやら、それすらハッキリとは致さぬ私の今日此頃の身の上、碌でもない身體の所有權さへどうやら人樣のゝやうな氣がして、世の中に在るも消ゆるも、私には何の痛痒もないのだ。と此う思つて、どうか超然として暮らして見たいと考へては見ますものゝ現在の苦境に驅られては、此の果敢なき浮世をいつそ一思ひに後にしたらなど、あらぬ考へも浮んでまゐるのでございます。姉さま――どうぞ私に『姉さま』と呼ばせて下さいましな――私にはあなたより外に姉さまと呼ぶ方がございませんもの。あゝ廣い天地に、若しあなたといふ姉さまが居らつしやらないな

らば、私ほんとに生きて居たくはありませんわ。此節の私の心の病、お目にかゝつて緩々いろ〳〵と御相談を願ひたいとは思ひましたものゝ、面と向つてはお話致しにくい點もございますし、それに涙が先に立つて、折角の御相談も出來ず終ひになりはしまいかとの懸念から、今回は私の思ひのありたけを、廻らぬ禿筆に賴むことと致したのでございます。姉さま！私の生命はお返事一つ。どうぞ馬鹿々々しいなんて叱らずに、一生のお願ひですからシンミリと相談に乘つて下さいな。

何から申上げたら宜いのでせう。書かうと思つても思つても、只胸ばかり迫つてまゐるんで御坐います。けれども一旦申上げやうと決心しましたからは、もう恥も外聞も忘れて一切合釆ぶちまけてしまひます。そらあの……去年の天長節の晩、濱田先生の處で歌がるたの會があつて、あなたもお梅さんも入らつしやいましたねえ。あの時、私から左の三人目に坐つて居た男の人が御坐いましたらう。固より美男子といふ方ではありませんから、初めての方なぞにはお氣も着かなか

つたか知れませんけれど、それがあの濱田先生の御次男で二郎といふ方なので御坐います。私が一昨年の春、濱田先生のお宅へ御世話になることになりました頃は、まだ十八の――私からは二つも年下の――「惡」とはどんな事やら、それすらもよくは御存知のないほど無邪氣な、愛らしい青年でございました。私は今まで、世の男子といふものは、唯淫奔で、無責任で、やりばなしで、利己心の塊りで、貞操だとか柔順だとか、婦人にばかりむづかしい事を押しつけて、その癖、節制心とか忍耐力とかいふものは皆無なものとばかり思ひつめて居りましたが、此の二郎さんと一つ家に住みましてからは、今まで全く私の考へが拗けて居たのだといふことを知りました。二郎さんといふ方、ほんとに何といふ善い方なのでございませう！思ひやりの深い、さつぱりとした、そして物に動せぬあの膽力、男子の典型といふものが若し世にあるならば、此の方こそそれと私は窃かに心の中に思ひ込んだのでございます。かう思ひますと同時に姉さま！あさましくも私の心は早や何者にか捉へられてしまひました。此の時から私の心は、只或るものにのみ向つて動き、我ながらどうして此うも變つたものかと、怪しまれるほどでございまして、いくら思ひ切らう思ひ切らうと致しても、すればする程、思ひの増さるばかり、日に幾度となく顔を合す其都度に、何とは知らず人恥かしき心地の堪へ難くのみ感じました。併しそれも、霎時の間、かくて月日の經つがまゝに、二郎さんと私との間には、いつしか意念の疏通するやうになり、勿體ないことながら、つい先生や奥様の目を偸んで、美くしの甘酒、「自由戀愛」といふものに醉つて居たのでございます。かやうに申上げましたら姉さまは、さぞ無分別な奴とお下げすみも御坐いませう。二歳も年上の姉の身として、心の駒の制し切れぬばかりに、罪もない好青年の一身を邪道に引き入れ、自他二人を野合、私通といふ卑しむべき境遇に沈めて、一生を不名譽に朽ち果てさせやうとは何といふ恐ろしい女なのでございませう。あゝほんとに何故私は此んな惡魔に誘はれたのでございま

せう。野合！私通！何といふ陋しい文字！何といふ汚はしい言葉！あゝ神は何故私がこんな惡魔に捉へられるのを救ひ出しては下さらなかつたでせう。あゝ口惜しい、情けない。かくして私は此の武藤の家の名を、私一人の爲めにすつかりと泥を塗つてしまふのでございます。私これを思ひ出しますと、もうどうしたら善いかと途方にくれてしまひます。姉さま！こんないたづら女は自殺するのが當然なのでございませうねえ。

姉さま！私もうつく〴〵此世が厭になりましたわ。どうしたつて私は二郎さんを思ひ切れず、二郎さんは又私を忘れて下さらないんですもの。けれども二人の仲はもうとても行末の見込なんかございませんの。何故といつて、二郎さんのお家は彼あした立派なお身分で、日常、上流社會とばかり交際して居らつしやるし、私の家は貧乏士族の、明日の生計にさへ支へてゐるもの、どうして二郎さんのお父樣が私なんぞを迎へて下さるもんですか。それに、お聞きになつたでせう、二郎さんには近くお嫁を貰ふといふので、濱田先生も奥

樣も大さわぎ。二郎さんが詮方なしに私の事をそれとなくお打明け遊ばしたら、お父樣もお母樣も以ての外の御不機嫌で、そんなものは一刻も邸に置くことはならないと、とうとう昨年の暮、體よく私を出しておしまひになつたのです。御親切な方々ではありましたが、何とやら氣の置ける、怖いお方と思つてゐた奥樣から「都合が有つて暇を」と伺つたときの私の心中、姉さま、どうぞ察して下さいまし。近々の中に二郎さんと御結婚なさらうといふのは、二郎さんとは幼さい時からの、親の選んだ許嫁で、二郎さんは、いつでも厭だ厭だと仰しやつて居らつしやるのでございますけれど、どうせ親御樣達のお計らひでは、否應なしに其うなることでございませう。それでも二郎さんの仰しやるには、「いくら親の命令だとて、戀愛の自由をまで犧牲にはさせられない。死んでもあなたを愛する心は變へない」と私に言つてお聞かせにはなりますが、いくら私を愛して下さるとて、天にも地にも容れられぬ不孝の子とおさせ申しては、此の私が濟みませんゆゑ、私の心は

千々に劈かれる思ひながら、わざと御結婚をおすゝめ申して居りますのです。あゝ義理と人情、位置と財産、思へば〳〵つらい——うらめしい。私の兩親も、私の今日此頃のやるせなさを、うす〳〵は承知して居りながら、財産といひ、年の違ひ、とても成らぬ緣とあきらめよとばかり申します。人の子は何故に親から生れたのでせう。なまなかに文明の世とやらに生きて、財産や名望の關に隔てられ、思ふ戀も叶はぬ身ならば、岡山女學校生徒の何某孃のそれの如く、私とても此の用なき身體を、一日も早く彼世に運んでしまひたく思ひます。

それに姉さま！私はづかしくつて申上げられないことが一つございますの。こんな事もと豫て氣支はなかつたでもございませんが、いざとなつての今の身は、どうして善いやら私には別りません。後の後まで、罪もない子が『私生兒よ』『私生兒よ』と罵られ嘲けられ、私とても憂い辛い世の凌辱の的にならねばならぬ運命と定まつて居る身。あと五箇月の中に何となりと片を付けねばなりません。大方の決心はもうついては居りますけれど……あゝもう泣きも嘆きも致しますまい。好い年をして自由戀愛などゝいふ空想詩人の夢にあこがれ、親の許さぬ不義理の戀をした神の罰。あゝ空恐ろしい。切めては姉さま！此世のお願ひに、どうぞ私の犯した罪から、しばしなりとも逃れ出でゝ、安心の出來ますやうお救へ下さいまし!!

あゝ書きました、書きました。これで胸が少し輕くなつたやうな氣がします。姉さまは之を讀んでさぞ吃驚なさいましたでせう。さぞいやな女と思召したでございませう。

あゝもう三時が鳴つて居ます。父上や母上は今どんな夢を見ていらつしやるだらう。あゝもう涙も盡きました。墨汁も盡きました。らんぷも油が無くなつたと見えてジーンと音を立て初めました。あゝもう止めませう。止めせう。どうせ又明日も泣かねばならぬものを。

さよなら。

杉

二十八日

房子さま

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

何です心の弱い！お手紙は今朝いたゞいて、直ぐに讀みました。正直な潔白なあなたの身に、あれほどの大なる秘密があらうとは思ひもかけぬ事なので、ほんとに一時は吃驚しましたわ。けれどお杉さん、人は木や石ではございませんし、殊に血の多い婦人の常として、あなたの様な困難に出會すことは、往々ある事でございますから、そう氣を落すにも當りません。こんな場合に多くの婦人の不可い事には、ほんとうに確固とした定見と操守の無いことでございます。若し此の定見操守がありましたならば、これしきの難局、どんなにも切り開いて行けぬことは無い筈でございます。失禮な申し様ではございますけれど、こればかりの事に、そう大騷ぎを遊ばすやうでは、あまりにあなたの信念が薄いことを表白するやうになるではございませんか。あなたは基督教の信仰に入らんとして未だ神の思召を信ずることが出來ず、科學の神髓を學ばんとして未だ其の理論に徹底せず、つまり宗教と科學との中

ぶらりんになつて、煩悶して見たり苦惱して見たりして居らつしやるのです。

考へてごらんなさい。愛するお二人の仲を作つて下されたのも、あなたが濱田さんのお邸を出るやうになつたのも、二郎さんが別にお嫁を迎へなければならなくなつたのも、皆な神樣の思召なのではございませんか。泣いたとて笑つたとて、此の世の中一般の爲に神さまが善い樣にして下さらうといふものを、どうして變更して下さいませう。もし又あなたと二郎さんとの仲が、眞に神樣の思召に副つて居るならば、たとひどんな障碍が中途に起らうとも、神樣はきつとあなた方を夫婦にして下さいます。そう思つて見れば、今の此の困難は、あなた方の忍耐力を神樣が試驗して居らつしやるのかも知れません。あなたは平素御自分で基督敎徒だと言つて居らつしやるではありませんか。それだのに未だ神樣の御心が信せられぬとは餘りですわ。

私としては基督信者で無いだけに、こんな場合に對しては、又おのづから別の考へを持つて居るのでござ

います。

あなたは二郎さんがあなたよりも年下なのを大そう氣にして居らつしやるが、それは、あなたはつまらない習慣に縛られて居るのです。女が男よりも年下でなければ結婚の出來ぬといふ規則が、何時どこにありますか。あなたは御自分の昔風な教育から、女子奴隷主義、女子玩弄主義の結婚の慣例を無視することが出來ず、われと我が身を苦しめて居らつしやるのです。「野合」「私通」なるほど文字の面は醜陋なのでございませう。けれども其の之を行ふ愛に滿ちた精神は、世にこれほど潔白なものはございますまい。かく申せば世の人は直ぐに言ふかも知れません。たとひ其の精神は高尚であらうとも、肉の關係がついた以上は、その時が既に畜生道に墮落した時であつて、もう此うなれば高尚でも何でもありやしないと。多分あなたも此んなお考を持つてゐらつしやるかも知れませんが、何故に肉の交りが卑しいのでございませう？なるほど、愛もなく人も選ばぬのであつたら、それこそ眞の野合で卑しくも

ありませう。けれども我が夫にと定めた約束の人に處をゆるすのが、何で罪になりませう。何でわるい事がございませう。それは未だ公然の夫婦關係にならぬ前に、多少節制の足らなかつたといふ憾はありましたでせう。克己の念が弱かつたといふこと、それは、あなたの爲めに惜むべきことではございますけれど、さればとて愛の心の溢れて玆に至つたものを、私は批難攻擊を敢てする程の、無情な眞似は出來ません。

あなたは自由戀愛といふことを仰しやりながら、まだ眞の自由といふことをお知りにならないやうです。位置とか財産とか、階級とか命令とかいふ制限のあるものが、どうして自由といはれませう。ほんとの自由は、絶對の自由でなければなりません。

今の世に婦人の身ほど自由のないものはありますまい。學問の自由なく、生活の自由なく、法律の自由なく、道德の自由なく、思想の自由すらも無いではございませんか。少し大きな聲をしてさへ、お轉婆とか何とか、世の批難攻擊を免かれ得ぬ世の中に、唯一つの

自由は戀愛の自由でございます。婦人の身から、若し此の自由をも奪はれるやうな事がございましたら、私共は、もう生きて居ることも出來ないのです。戀愛は婦人唯一の自由で、又最高の權威でなければなりません。此の自由のためには、どんな道德にも、どんな宗敎にも、どんな習慣にも反抗して、大膽に勇猛に世と戰はなければなりません。腐れ朽ちた舊道德の思想に支配されて、あなたの樣にそう煩悶なさつては、ほんとに仕方がないではありませんか。

いくら親の命令だとて、愛のない結婚を承諾したり、させたり、しやうといふのは、あんまり無分別なお考へ。こちらの心さへ強ければ、大抵の抵抗は押退けて行けるものでございます。階級結婚や服從道德に腰を屈するなどゝは、もとより思ひもよらぬ事。

姙娠と申すことは婦人の大いなる誇りです。まちがつた社會の攻撃には、あべこべに手強い批難を加へておやりなさい。決して〳〵それが爲めに弱い心を起したり、つまらぬ事をなさるやうな、心得ちがひの無い樣に、神かけて念じ上げます。

今の娘たちが、あらぬ事を仕出かしては新聞紙上の物笑ひとなり、あたら花を散らしては心ある者の眉を

顰めしむるのを見るに、多くは弱い心から、世間の壓迫に堪へ得ないで、無分別の事をしてしまふのでございます。此う申せば變ですけれど、あなたはもう幾つだと思召す。十九や二十ではあるまいし、女の二十二といへば、もう一廉の分別盛り。こんな理不盡な世の制裁にちゞこまらず、どうせ戀をする位なら、滿身の血と涙を籠めた反抗の聲を擧げて、まつしぐらに革命の道に突進なさいましな。

かへす〳〵、世の波にけ押されず、いさましく戰ひをつゞけられて、お腹のお子さんもあなたもめでたく自由の彼岸にかちどきを擧げる時の、一日も早く來よかしと、深く〳〵祈つてをります。唐突の際に此の大問題の御相談、あまりうまく考へも纏まりませんが、思ふことの片はしを、只お返事までに書き付けました。いづれ兩三日中に、久々でゆる〳〵とお目にかゝつて、積もるお話を致しませうが、どうぞ〳〵お身を御大切に遊ばして、うれしき春をおまち下さるやう偏へに願ひ上げます。春はもう間もございませぬものを。

さようなら。

一日　房

杉子さま

女子の威嚴に就て

中尾傘瀬

本號の限定記事として、僕のは「夫婦の目的」と豫告されてあつたが、前號既に深尾君堺君等の之に關したる文が見えたので――殊にそれが僕の意見とも似たものがあるので――姑く控へて之を掲げる。

近頃不圖したことより、女子の威嚴といふことに就いて考へてみた。嚴威といへば、直ちに男子のことのやうに想像するのが普通で、威あつて猛からずとか、威風堂々とかいふのは、特に男子の爲に造られた形容詞のやうになツてゐるが、果して女子には威嚴といふものが要らないか、之は一寸研究してよい問題と思ふ。

而して、若し果して威嚴といふものが、女子にも必要なるものとすれば、それは如何なる場合に於いて必要なるか、又如何なる時に於いて現はさるべきものなるか、といふことをも窮めて置きたい。

余は基督敎の信者であるから、先づ聖書から例を援きたい。日本譯の聖書に、威嚴といふ文字の見えたのは幾箇處あるか知らないが、文字から憶ひ起こさせる所は、かの山の上の大說敎のあツた時で、福音記者は基督の表情を形容して、學者の如くならず權威を持てる者の如くなりき、と云ッてゐる。權威と威嚴とは少し異なるけれども、權威の中には確かに威嚴の分子が含まれてゐなければならぬ。又基督が傳道の始、惡魔に誘はれて高き山の頂に登り、世界の國々と其榮華を見せられて、爾若し我を拜せば是等のものを皆爾に與へむと云はれし時、基督は「サタンよ、退け！」と叱咤したので、惡魔は彼を離れて天の使來て彼に事へたといふ。こゝにも彼の威嚴を偲ぶことが出來るのである。斯樣な話は未信者の方には異な感じを喚ばるゝかも知らぬが、寧ろロマンチックの味があツて面白くはあるまいが、而してそれが又余に取ッては、こゝに謂ふ所の威嚴を示すべき場合を敎へ與れたものとなるから、一層有難いのである。併し以上の二個の場合よりも、遙かに強く威嚴の現はされた時と想像し得らるゝのは、彼が「地に泰平を出ださむ爲に我來たれりとおもふなかれ。泰平を出ださむとに非ず。刄を出ださ

む爲に來たれり」云々の語を十二の弟子に向かッて説いた時、その時こそ、實にほんとうの威嚴の現はされた時と信ずる。大威嚴の相なくて、何うして斯くの如き激烈大膽なる告白を吐き出せるものか。此時の基督の樣子に就いては、福音記者も、權威を持てる者の如くなりき抔とは書いてゐないが、それは書くに用ゐるべき形容詞が無かッたので、事實を今想像するにも、必ずや大なる威嚴の表情が活躍してゐたに違ない。此故に此段が聖書中、最も激烈にして、最も痛快なる場所になッてゐるのである。

是等は皆基督に係かる話。彼は余の信仰よりいへば、神の子で、既に人間を超絶し、男女性を沒却した性格であるから、其威嚴の表情は、男子も女子も共に理想として仰ぎ認めてよい所と信ずるのである。但神の子の威嚴であるゆゑに、標幟として或は高きに失する嫌があるかも知れぬが、凡そ理想といひ、標幟といふものは、餘り手近に在るよりは、寧ろ手の達かぬ位の高い所に在る方がよい。さうして人間の努力で實際達せ

られる所は、其半にも及ばぬやうなことがあッて、丁度よい加減になるのである。初から低くては、それは理想でない。理想は高いものに限ッてゐる。

さて此威嚴は我々人間の實際生活にも必要なるかといふに、それは最う議論の無い所で、既に絶對全能の神の子の生涯にも其必要があッたとするのであるから、彼に遠く及ばぬ弱き人間、殊に男子に比べて、より弱き女子に取ては、最も缺いてはならない資格と思ふ。尤も女子が平生極めて大人しく所謂蟲も殺さぬといふ姿であるのは、敢て咎めぬけれども、一旦怒る時、即ち惡に對して怒る時は、眞に烈火の如く、秋霜の如く、怒らねばならぬ。但叨りにつまらぬ事に怒を移してはならぬ。こゝの掛引が肝腎である。然も惡に對する憤怒をして最も有效ならしむるものは威嚴である。

而して其威嚴が、今日に於いては、男子に在ッてよりは、女子に在ッて一層緊切に必要ではあるまいか。といふわけは、由來我邦の女子諸君は、封建の習慣、舊時代の道德の然らしむる所で、兎角男子より見下げ

られて、さうして偸安んじてゐる風がある。更に砕いて言へば、常に男子より馬鹿にされて、意氣地ないとも感じてゐないのである。之は社會一般のならはしとなッて、今日女子の學問が盛んに行はれてゐるといひながら、まだ容易に拔け失せぬ所である。「女子供」といッて、子供と等し並みに呼ぶ語は、何と婦人を輕しめた沙汰ではないか。讀賣新聞といふは、家庭新聞として好評のある新聞であるが、其三面の欄頭を見ると、「此一頁は女子供の爲に別してやさしく書いてあります」と標榜してゐる。何と婦人讀者に對して無禮を極めた大侮辱の言ではあるまいか。記者も記者なら、之に抗議を持ち込まぬ婦人も婦人である。（世の中は、おしなべて斯樣な風で婦人をあしらッてゐる。）併し之は、男子の方が惡いので、從來永く男子が、女子と小人とは養ひ難し抔と、女子を斥けて、教育しないまゝで、打ち捨てゝ置いたから、斯樣な始末になッたのである。古の流でいへば、女子は馬鹿なもの、無學なもの、內にすッ込んでゐるもの、子供の傅か、竈の番か、を

神妙に勤めてさへゐれば、それでよいとしたものであッたからである。所が今は男子も（自己の勝手よりとは言ふものゝ）、女子の教育されむことを望むやうになり、又之を尊敬せむとするやうにもなッて來た。之が時勢である。又當然である。然も斯くの如く女子の要求（自覺的ならずとも）の聽かれ、多年の枉屈の伸び行くのは、喜ぶべき現象として、此際女子諸君に於いても、大に勵み、大に奮ッて、自家の位置を高めらるゝことに熱中せられたい。

かく望むと同時に、余の諸君に警告したいことは、斯かる過渡時代の弊として、尚舊思想を懷く人々の、動もすれば學問しつゝある婦人に向かッて、侮辱を加へむとする傾向である。殊に婦人諸君には、男子に無い危險もあッて、隨分脅迫暴行などに出會はされぬとも限られない。斯樣な注意は、洵に忌まはしい話で、成るたけは言ひたく無いが、實際まだ今日の社會には有り得べき危險であるから、少しく申すのである。唯其手段が以前より餘程温和に——叛的ならず——進歩

してゐるのみで、危險の意味は變らぬやうである。（橋本青雨の『愛の犠牲』を見ると、呉井春美の妻雪江が、別莊先で、平生熱懇にした三村桃外といふ男に、温和なる脅迫を受けて、遂に心の錠を取り外した一節がある。又事實としては岡倉由三郎君の細君が、夫君外遊中、家に寄食する一大學生と不義の褄重ねをした話。（これは本紙の讀者は御存知の筈）最早十數年の昔にもならうが、巖本善治君が其監理する所の明治女學校の生徒に向かツて、「暴漢の爲に辱を受けむとしたる時は、如何に處すべきや」といふ問題を示して、彼等の答案を求めたことがある。（古い『女學雜誌』を見れば判かる。）斯樣な問題は、生徒に課すべき性質のものであるか否かは、別に考ふることゝして、今は唯之に依ツて、當時斯樣な問題を研究する必要のあツたことを知り得るのである。而して此問題にあらはれたる暴漢の種類は、今と大に意味を異にするであらうが之に對する解答の用意は、當時も今も別に變はりは無いと思ふ。三輪田眞佐子君は、斯ういふことを云ツてゐる。今日女子が貞潔に身を保ツて行くには、常に匕首を懐にしてゐなければならぬと。これは些と極端ではあるが、その匕首を懐にしたやうな覺悟心得は無くてならぬ。

從來眞佐子女史の教育意見や、道德觀は、余の服せぬ所であるけれども、此一言は、此意味に直して味がある と思ふのである。實に今日は種々なる危險の多い世の中で、暴漢ならぬ桃外や、一大學生のまだ〳〵多いことゝ心配される。それゆゑ劍を呑んでゐる位の威嚴は、必ず時處に應じて現はさるべき心得でゐなくてはならぬ。流石に嚴格主義の道德が行はれた時代のことで不思議もないが、かの野中兼山の女にして婉女と云ツた婦人は、終身嫁がず、六十幾歲になるまで處女の姿で、常に振袖を着て匕首を懐にして外に出たといふ。それが或時途中で、藩の家老の輿に乘る者に出逢ツた時、供先に、避けよと制せられて「我も執政野中兼山の一女なり」と名宣ツて、遂に讓らなかツたといふ話がある。之は今の世に通用せぬやうな話であるが、此權式と威嚴とは備へて貰ひたい。又余の鄕國伊勢に稻垣直子と云ツて、之も今年七十にもなツてゐやうかと思ふ老婆であるが、餘程變はツた育ちの婦人で、やはり處女の生涯を續けて、今も懐劍を持ツて出るといふ勢。七十にもなる老婆に、調戯いふ醉酊人も無からうが、彼女の昔を忘れぬ嗜みと其心得とは採るべしである。西鶴？の『本朝櫻陰比事』を見ると、町人の後家が、

高枕して寢むに、帶紐解かず、手近へ刀を取り廻し、用心深く夢も油斷をせぬ風情と書いた一節がある。之は婉女などの武家育ちの婦女の風俗が町家へ移ッたもので、德川時代は勿論、今日に至るまで、多少の面影を殘して、尙直子の如きを見るわけであらう。而して、彼等が皆共に萬一の場合を推し測ッて、威嚴を保たうとした手段よりも、其心意氣、其心得が深く我々を感動させるのである。

之を近時流行の二三小說に見るならば、亦面白い例の無いでもない。先づ『己が罪』の箱根温泉場に於て、櫻田夫人環が、古き戀人の塚口虔三に邂逅して、再び舊情を温めよと迫られる所、環夫人に凛乎としたる威嚴が無ければ、決して逃れられる場合でないと思ふ。又『乳兄弟』に於いても、房州海岸で、君江といふ侯爵夫人候補者が、古き情人の高濱勇に會見する所、君江に威嚴が無くては(よし彼女は惡事を遂げむとしたのではあるけれども)、忽ち大破綻を來たす所であッたのである。更に『不如歸』を見ると、女主人公浪子と輕薄軍人千々岩と會談する所、此時も浪子に於いて威嚴を有つべき場合であッたと思ふ。最後に『黑潮』より援くならば、喜多川伯爵といふハイカラの馬鹿殿樣が、漁

夫の娘を妾に入れて、正妻と其子道子といふを疎んじて別居せしめた後、或日彼は其母子を訪うて、道子が己を迎へに玄關まで出なかッたといふ瑣細な廉で、十三になる少女を捉へて叱る條(母傍に在り)に、「眞紅になッた道子、寸步も動かず、頭も下げぬ。濃い眉少し釣ッて、黑玉の眼はきらきらと。眞面目になッた顏は一段の美に嚴を添へて、冒し難い威光に、親ながら打たれた伯爵は、手持無沙汰の兩拳を洋袴の衣兜に突き込んで、室内を彼方へ此方へ。」とある。伯爵の間拔面と、道子の美にして威嚴ある面わとは、目に見ゆるやうではないか。

以上の說明や、例證で、女子にも威嚴の甚だ必要なることを悟られたい。然も威嚴は如何にして養ひ得るか。これは本文の趣意で無い。が一言すれば、深く修養して、見識を立つると共に、品性を作らねばならぬ。威嚴は衷なる人格の表現である。さもなき威嚴は滑稽に過ぎぬ。

家庭時言

久田生

▲衣食と迷信、住居と迷信、病と迷信、儀式と迷信、交際と迷信、戰爭と迷信、觀じ來れば日本人は殆んど迷信の生涯を送つて居る。

新聞記者先生は、東鄕日和と天を仰ぎ、靈應靈鶴と有難がり不思議がるところを見、學校の先生が勅語を拜んでばかり居て實行せぬところを見ても、此迷信は次代から次代へと順次傳はつて行くらしいので、なんだかイヤになつてしまう。

假りに小學の先生が迷信を敎えぬにしても、家庭ではどし／＼小さい頭へ、種々な迷信を注入するので、十歳前後になると、早や一個の迷信的動物かと思はれる位になつてしまう少年さへ居る。旣に斯樣なつてから、先入主の迷信を打破しやうとしたとて、なか／＼そうは參らぬ。

玆を思ふとせめて讀者諸君丈けでも　其迷信的生涯から今少しく脫するやう、日々に日に／＼心がけて戴

きたい、そうして少年敎育に勉めて貰ひたい。

▲日本人は蝸牛ではあるまいし、息子の家、娘の家、老人の家、自分の家と云ふ風に、マッチ箱のやうな住居を幾個にでも分けて、便所と臺所の數ばかりを殖やして居る。一體この風は前々號で西村君が「嫁と姑と云ふ世間での大問題も、我が家には爪の垢程も價値はない」と云はれたのや、中尾君の臺所廢止說にも關して居て、チト考へ事ではあるまいか。そうして臺所と便所の增えるのは、不潔なところを多くする譯で、一方衞生上の問題にもなつて來る。

併し斯樣な現象は、主我的で狹量で、經濟の根本義を誤つて居る日本現時の家庭では、幾分免れぬやうにも思はれる。そこで矢張これにつけても我等は社會組織を改革し、日常生活上の無駄事を除き、そうして精神の修養と衞生に資せねばならぬと、切實に感ずるのである。

▲と云ふにつけても、人類の本義を自覺する底の敎育をどうか普くほしいものである。これが無ければ總て

自分の事が分らんで困る。第一自分のこと、家庭のこと、自分の住む社會のこと、これが心底から解せんで困る。自分でわからんことは兎に角、人に嚙んで含めるやうに聞かせられても解せず、その癖、人を誤解し誠に不始末ではあるが、それでも遂に醒めず解せず讀めずして終はるかと憶ふと、遺憾と云はうか、齒痒いといはうか、誠に氣の毒にも哀れなことである。

　それにしても自己の敎育修養により、或は天來の啓示、機會、刺戟によつて、心靈上の自覺を得られた諸君は、此生涯に顧みて、なほ一段〳〵の修養により人格を高め主義に努められると同時に、また迷ふ者解せぬ者を敎へ導き、或は訓化し覺醒するやう勉めて下さい。その中、天來の啓示は現はれ、生ける敎訓に接し、彼等も追々醒めるに相違なからうと思ふ。

▲ある婦人雜誌にたいした肩書の署名で『家庭を唯々安樂の場所と思はず、社會の一部と思ふて左樣贅澤を云はぬがよい、その代り社會に出てゝも家庭の積りで………』と書いてあつた。仰せは御尤もであるが、無暗

にこせつき、矢鱈に階級がる今の社會で、無駄事半分の職業を採るに、家庭で胡座談をするやうな淡泊と寛懐だことが出來やうか、若しそんな氣で居たら立どころに失職の憂はあるまいか、御身のやうに社會を家庭と思へといふことは、我等の主張して居るところと似ては居るが、實際今では此風は小さな家庭の中に押し込められてしまつて、再び擴げるには是非とも社會の組織を變へねばならぬのだ。疑ひあらば御自身先づ、金ピカの禮服を棄てて、下級の會社員にでも雇官吏にでもなつて御覽じろ。一日にして其社會家庭主義は消滅して終ふであらう。そうして今一息で社會組織の欠陷が自覺出來るであらう。

臓器料理

動物の臓器は、往々料理の材料として用ゐらるゝものであるが、食物として其の價値は如何と言ふ事を考へて見ましよう。

一、腦。牛、犢牛、羊などの腦髓を食用に供します。腦は多量の脂肪、蛋白質及び燐酸鹽類を含有する滋養品で、肉よりも消化し易いものである、故に比較的胃の弱き人にも耐えらるゝ食物が出來る。但しブレーンが多量の燐を含んで居る爲め、腦に特効ある滋養品とは言へぬ。

二、心臓。これは成分に於て他の筋肉と左したる相違はないが、其纖維が堅くして甚だ消化し難い故、假令滋養分が含まれて居ても、運動の激しい强壯な人のみ之を食用とすべきものである。

三、肝臓。肝臓は多くは蛋白質、糖分、及び肝油と共に少量の燐を含む滋養品であるが、消化は左ほど容易でない故、通常フライなどにしたものは胃の弱き人が食ふには不適當である。

四、舌。多量の膠質と肪脂とを含む筋肉の一種であつて、調理法によつては可なり消化し易きものとなり、

滋養に富んだ食品である。

五、腎臓。腎は一種奇妙な風味のあるものであるが、左ほど滋養品と言ふものでなく、且つ其内に尿素の如き排泄物を含んで居る。特に消化の困難なものであるから、强壯な人でも好んで用ふべきものでない。

六、ツライブ。これは反芻獸の胃であつて、食料には主に牛の胃嚢を用ふる。ツライブは多量の蛋白質を含む滋養物で、至極消化し易いものであるから、病人に與へても多くの場合には害の無き食料である。

七、スヰート・ブレツド。これは動物の胞腺で、普通の淋巴腺と同じ構造であるが、其動物が成長するに從つて漸く小さくなり、二三歳に達する時は、唯その痕跡を止めるだけになる。通常食用に供するは犢牛か小羊の胞腺であるが、その代りに牛の膵臓をも用ゐて通俗に之をスヰート・ブレツドと名つける。凡てスヰート・ブレツドは滋養に富み、消化し易いものであるから、胃の弱き人や病後の人に與ふるに適當な食品である。（謙亭）

炬燵雜談

境　利彦

◎●●●●● 異人種結婚　英語でInternational marriage 之を譯すれば異人種結婚が、近來漸く流行ものゝ一つになつた樣だ。小泉八雲氏(Mr. Hearn)の細君が日本人であつたとか、靑木周藏氏の細君が獨逸人であるとか、そんな例は久しき前から決して少くないが、予が今日に於て殊に之を流行といふ所以は、世間が稍や之を是認して、少々は冷嘲の語氣をも漏しながら、兎にかく之を善い事、面白い事、しやれた事として、語りはやすに至つたからである。尾崎行雄氏とテオドラ孃との結婚の如きも、矢張り此の一例と見て善からうが、其の如何に花々しく謡はれたかは、諸君の知らるゝ通りである。予は世界人道の上より見て、一人種と一人種とが相憎惡し、一國家と一國家とが相敵視するが如き、偏見淺慮を厭ふが故に、世界的、人類的、博愛的の事なら何でも好で、從つて此の異人種結婚も大好である。日本の社會が漸く之を是認し、之を歡迎するに至つたのは、實に喜ばしき事である。今に日本人が續々朝鮮人とも結婚し、支那人とも結婚し、印度人とも結婚し、露西亞人とも結婚する樣にならなくちや面白くない。

◎●●●●● 金子コンガー夫人　本誌に毎度論文を寄せられた、予の友人金子喜一君は、去る頃、米國紐育に於て、Josephin Conger孃と結婚せられた。去年十二月の本誌に The Coming Woman といふ英詩を寄せられたのは即ち此の新夫人である。夫人はConger Kaneko といふ組合せ名を用ゐて居る。先日、夫人より予に宛てゝ自著の詩集を贈られた。其中に夫人の肖像の寫眞版にされたのが挿んであつた。

◎●●●●● 波蘭の珍客　數日前、予の家に思ひもかけぬ珍客があつた。それは露領波蘭人ピルスードスキ氏であつた。氏は少年の時、社會主義運動の政治犯に依つて樺太に流刑の身となり、それより十九年の間、樺太、浦鹽、北海道の間に在つて、人類學を研究して居たが、今度赦されて歸國の途次、暫く東京に滯在して居るのであ

る。そして氏は此の滯在中、一面には人類學者を訪問し、一面には、社會主義者と交際を望んだので、それで態々予を尋ねて來たのである。氏は其年未だ三十九歳といふのに、兩鬢既に多く霜を宿して、多年苦勞の痕を示して居るが、それにも似ず極めて無邪氣な、極めて人の善い、親みやすい人物である。氏は其の本國語の外に、佛、獨、露の三國語に熟して居るけれど、予が其の一つにだも通せぬので、止むを得ず氏に取つては最も不得手なる英語を以て話をした。双方ともに思ふ樣に口が廻らぬので、隨分おかしい事もあり、もどかしい事もあつたが、それでも人間と人間だ、同主義者の交りだ、互ひに胸襟を披き盡せば、實に裸で抱きあふ樣な心地がした。話の序に異人種結婚の事も出たが、氏は甚だ之を好むと云つた。本國は疾くの昔、獨、墺、露の三大國の間に分割せられて、自身は今では露國に屬するとは云ふもの丶、其の露國政府からは流刑に處せられて、極北の雪の間に十九年の長日月を過して、今僅かに暖き日本の首都に客となつて居るの

だもの、國家的偏見などは無い筈である。異人種結婚を好むも實に其筈である。氏の歸り去る時、波蘭語で別れの挨拶に何と云ふかと問うたれば、『ドヴイゼニ』と教へて呉れた。そこで予等は氏を玄關に送りながら『ドヴイゼニ』『ドヴイゼニ』と云ふと、氏は却つて日本語で『サヨナラ、奥さん』など丶云つて居た。翌日になつて氏の寄こした手紙の端に、『昨日寫眞で見た君の娘を、一度僕に見せて呉れ。僕は波蘭に歸つてから、君の娘の爲に善い夫を探してあげる。そうすれば例の異人種結婚が出來て面白いぢやないか』と書いてあつた。世間では、日露戰爭に燃された敵愾心の熱に醉うて、まだウト〳〵として居る人も多い樣だが、それと同時に、日露兩國人の間に、こんな睦まじい話も交はされて居るのだ。

◎慈善は侮辱なり　東北地方に大饑饉が起つたので、世間には慈善の聲が高くなつた。あちらでもこちらでも、東北窮民の爲に慈善の寄附を募[illegible]樣な事に相違ない。現在饑寒に迫つ

ローヤル水ハ

最モ高等ナル最モ進歩セル最モ名譽アル化粧水ナリ

定價 拾錢 拾五錢 廿五錢

ローヤル白粉ハ

最モ改良セル最モ優等ナル無害ナル白粉ナリ

定價 拾錢 拾五錢 五拾錢

東京銀座壹丁目

發賣元 つやぶきん 佐々木商店

THE
Simple Life
By Charles Wagner

ヒ、イースト、エンド、ジエスト記者
布施知足譯

簡易生活

既刊　全一册

定價參拾錢　郵税四錢

此書の原書は近頃英米の讀書社會に於て非常の好評を受け、第二のバイブルと迄評されたる頗る有益なるものにして、此書の感化により煩悶苦惱の域より脱出し、幸福健全なる生活を送り得るに至りたる人幾何といふことを知らず、米國大統領ルーズヴルト氏の如きは其最も熱心なる愛讀者の一人なりといふ、以て此書の價値を察知し得べし。

今能文の聞えある布施氏の筆によりてこゝに譯文成る平易流麗、何人と雖も面白く讀むを得。

惱める人、苦しめる人、樂しき家庭を作らんと希望する人、此書の誨ゆる簡易の福音を得られよ。

發行所　東京市神田區表神保町十番地　東西社

船に酔はぬ藥

（藥劑師堂主竹内余所次郎調製）

同十二個入同五十錢
同三個入十五錢
郵税壹函貳錢

此の藥は日本唯一の船暈の特効藥にして明治廿六年發賣以來既に數萬函を賣捌き此の藥の奇効に依りて安樂なる航海を爲したる人極めて多く誰人も其の不思議の効能に驚かざるなし此の藥の主効は嘔吐を止め胸の苦しさを消し胃をすかし頭を輕くする等にて船に弱き人も猶ほ船に慣れたる人の如く船中を自由に歩行し得らるべし外國渡航者は勿論沿岸航海を爲す人にても必ず携帶すべき藥也尚ほ汽車電車馬車馬橇の類によふ人も用ゐて同樣の効あり

さなだ蟲妙藥

定價三十錢　郵税二錢

一劑を服用せばさなだ蟲の全體其まゝにて下り其の頭部まで悉く取り去り得る保證藥にして明治廿六年發賣以來年々數千人の該患者此の藥によりて治癒せられつゝあり該蟲になやめる人一服を試み玉へ

發賣所　東京淀橋柏木町六十番地　竹内愛山堂藥房



か救はれるのであるから、惡からう筈がない。然し、若し慈善などゝいふ事を行はずに、而も饑寒に迫る者の無い樣にする事が出來たなら、一層結構ではあるまいか。全體、兄弟同胞が饑ゑて居る時に、之を救ふは我々の義務である。人類が人情を以て共同生活をして居るのなら、一方の不足は他方の餘る所で補ふが當然である。既に當然であり、義務であるならば、何も慈善などゝいふ妙な名を付けなくても善い筈だ。慈善と云ふと、何だかコウ上の方から下を向いて、大變に恩を着せて物を與へる態度が見える。それだから受ける者も自然不快を感ずる。「それでもひもじい時には隨分貰つて食ひもするが、恩を着せられては內心余り嬉しいものではない。先達て淺草に火事があつて、大ぶん貧乏人が燒けだされたが、其時蠣波鐵次郎氏といふ一人の武士の果があつて『武士は人の救助を受くべき者でない』と云つて、獨り饑に甘んじて救助を斥けたと云ふ話がある。少し氣慨のある者は、實にそう云ひたくなるのだ。救助だの、慈善だのと、そんな侮辱を受

けるには忍びなくなるのだ。世の慈善家たる者に、少しく此處の事を考へて貰ひたい。さり[illegible]に無[illegible]つた人に物を與へる事に反對するのではない。只、恩惠的の慈善を憎むのだ。慈善をするなら自己の義務として之を行へ。而して之を行ふと同時に、斯くの如き困る人を此の世の中に拵へて置くのは、即ち我々の過ちであると思へ。そして其の過ちを根本的に救ふの道を講ぜよ。

◎**恩給、實は謝恩金**　官吏などに恩給といふものがあるが、あれも社會の目より見る時は、老廢の者に恩惠として之を給すると云ふよりは、多年の勤勞に對して其恩を謝すると云ふ方が本當だ。恩給金と云はずに謝恩金と名づけたい。そうすれば社會が義務として之を贈るので、受ける人はどんなに心持が善いか知れぬ。總て世の中の事がそんな風にならなけりやア嘘だ。

◎**寄附の激賞**　『女子大學にては、日頃生徒に三井や森村などの夫人達が同校に少からざる金員を寄附したりと激賞して聽かせる結果、生徒等が虛榮崇拜の念を

生じ、理想と云つても……良人の人物はどうでも構はず只だ虚榮と結婚するに在り」と萬朝報に書いてあつた。慈善や寄附の「激賞」せられる處にロクな事はない。

◎婦人の請願　今期の議會に、進歩主義の婦人より二個の請願が出た。一つは婦人が政談集會に列するの自由を要求したもので、今一つは有妻の男子の姦通を禁ずる事を要求したものである。本誌は政治に關する事を論議するの自由を有して居らぬから、只だ是だけの報道に止めて置く。

◎婦人雜誌記者倶樂部　といふものがあつて、毎月集會を催して居る。一月廿五日にはニコライの會堂の中の青年倶樂部に開かれ、二十餘人の男女が雪景の中に親子丼など食ひながら、婦人服改良の事など語りあつた。別に書くほどの事も無かつたが、「廿世紀婦人」の今井歌子氏が前項記載の請願の事に就て氣焔を吐かれたのは、頗る我々男子を警醒するに足るものであつた。（二月十六日記）

思ひも寄らぬ便り

曲川生

浦和の堀内銀行の頭取、堀内左内君の總領千次郎は、一年前から、日本橋通り三丁目に、西洋小間物店を開いて居る。今日も店頭に座つて新聞を見て居ると五十餘りの田舎爺がきよと〳〵しながら、

「若旦那で御せえしたか。

と云ひ〳〵、這入つて來た。

千「オ、松助かい。どうした。郷里ぢやあ何も變つたことはあるまいね。お前も相變らず達者で結構だな。

松「いや〳〵結構な事も何も無えだ。若旦那、あのカメ（犬の名）は、とう〳〵死んぢまつただ。

千「カメが死んだ？ム、どうして死んだのだ。

松「喰ひ過ぎでさあ。

千「喰ひ過ぎだつて？何といふ馬鹿な犬だ！して一體何をそんなに喰つたのだい。

松『馬肉をウンと喰つたもんだね。
千『どうして、そんなに澤山の馬肉をあてがつた？
松『大旦那の馬が死んだでの。
千『オヤお父さんの馬が死んだ？そりや又どうして？
松『働き過ぎでさあ。
千『働き過ぎ？一體何だつてそんなに働かせたのか？
松『水を運ばせたんで。
千『水？全體何の水を。
松『火消の水を！
千『火消！オヤそれぢやあ、何處かに火事があつたんだな!?
松『若旦那！驚かないでおくんなせえ。大旦那の家が昨夜丸燒になつちまつたんで。
千『ナンダ宿許が皆燒けた？そ、そ、そりや大變だ!!どうして、何時、火事が起つたか？
松『わしや、どうも松明からでねえかと思ふがの。
千『松明？何の松明？何で松明を燃やしたのか？
松『お袋さまのお葬式でよ。

千『ナニ葬式!?そしておつ母さんは、お死なりなすつたのか？
松『お氣の毒な事でした。とう／＼あの時からは枕もお上げなさらず。
千『あの時とは？
松『大旦那のお死去りなすつてから！
千『お父さん？コレ松助、何を云ふ。お前はお父さんも亡なんなすつたと云ふのか。
松『ほんとにお氣の毒な事でなあ。大旦那は、それを聞くなり、直にウーンと云つたつきりでの。
千『ナ、ナ、何をお聞きなさつたんだ？
松『銀行が破産れたちう報知でさあ。
千『コレ松助、お前はまあ何と云ふ事だ。それ程の大事件を、何故すぐ話さないで、先程から下らぬ事ばかり云つてたんだ！

千次郎は、破れるかと思はれる頭を抱へて、ドッと其處に倒れてしまつた。松助は、面を背けながら、徐かに千次郎を助け起して云つた。

松『でも若旦那、誰だつて惡るい事あ、成るべく聞きたかアねえもんだでな。

（終り）

初春の草花

花の栽培に關する質問の中、初春草花の品評及説明、培養法に係るもののみに答へんとして之を草しました。其他のものは次號或は次々號に纏めてお答します　（二葉生）

（一）風信子

花をちよつとみても、海の彼方から來たことは判じられます。之を美しけれど雅韻がないとて通がるなぞは、偏頗な自然觀でせう。

西洋では枯衰し易い此花莖を糸で縛つたり、火酒の中に莖を浸したりなぞして、久しく保たせるやうにし、挿花及び小女の簪として普く用ひるそうです。若草萠ゆる春の野邊、ハヤシンスを簪した白皙小女三々伍々の逍遙、想像するだに興多く、優美な花と小女との對照も、さこそと偲ばれます。

花戸のヒヤシントと訛り、風信子と勿體ぶるは即ち此花で、根も葉も梗も水仙のやうですが、花になると少し趣きが變り、紫色のが普通で、なほ單瓣もあり重瓣もあり、紅、白、乳白色など種々あり、また一梗に

着ける花の數はずつと多いのであります。

花期は短くもありませんが、花が謝むと葉は漸々黄ばんで來ますから、枯れるのを待つて早々其球根を堀り上げ、乾燥した砂か鋸屑の中へ貯藏するのです。そうして秋の彼岸過ぎに輕鬆な砂壤土へ五六寸を離して二寸餘の深さに植え込み、それから時々油粕か魚肥か下肥の薄いのを施ると見事に育ちます。地植ゑのは藁などを覆ふて寒害を防がねばなりませねど、盆に載せたのは室内へ取込むもよし、一層、二月頃に植ゑこむも妙です。

（二）アネモネ

春は百木千草一時に蕾を破つて、妍を磨ぎますれど、艶麗アネモネのやうなのは先づ少いでせう。それに梗を抽いて宙に捧げられた花は、小さくて上品な葉と、大小色彩共、相照應するところ、誠に幽韻窈窕の趣きです。

更に一々花の種類を尋ねますと、八重咲、一重咲、菊咲など、咲き方を異にして居るうへ、白いのや、赤

いのや、藍色のや、紫のや、紅ゐのがあつて、若しそれを駘蕩たる春園に蒐めましたなら、綺麗な色彩、優雅な風韻など燦然として顕はれ、巧妙な自然の技工を嘆賞されるのであります。

此草は球根ですから、花がすんで葉が枯れますと、堀り出して乾いた砂の中に貯へ置き、秋の彼岸後再び植ゑ込むのです。肥料としては灰類及び過燐酸、骨粉などがよく、乾鰮、油粕の薄いのも結構です。そうして實生か、球根に傍生する子球で、容易に蕃殖されます。

(三) スネーク、ヘツド

近頃奇草が紹介されますと、發見者の名を紀念に、長十郎草など云ふ風に命名されて居る。今に權兵衛草、欲助草、ハイカラ草などいふのが出て來るかも知れませぬ。それにヘクソカヅラ、ウジコロシ、ヘビノダイハチなどいふ穢い氣味のわるい恐ろしいのもあると故外人のことを笑はれもせねど、如何にそれらしい容が見えたからとて、スチーク、ヘツド(蛇の頭)とは、聞くだに感服出來難い名前、萬事通がり文明がる英米人に、今少し氣のきいた名もと、人の癇氣が頭痛でなりません。

此草は日本の貝母と同類で、花は少し大きく市松形に咲き、黄色ではありますが、六瓣であると、心に淡紫の斑點のあると、及び、葉も莖も球根も共に貝母に似て居て、切花としても茶花としても誠に妙です。

之を園養するには、九十月の交、球根を腐葉土に植え込み、特別の乾燥温氣と、霜雪の害を除けば、來春早く挺を抽いて花を見せます。

(四) コルン、コツクル

英國では野原にも牧場にも澤山ありまして、晩春から秋になる迄咲き匂ひ、花の美しいのと蜜の甘いのに浮かるる胡蝶は、何時も埒に惑ふくらゐだそうです。日本ではこんな野趣を味はれませんが、遠來の種子を家園に育くめば、天眞の妍媚、誠に美しくまた珍らしい眺です。

葉は細長くて柔かく、莖は滑つこくて節が高い。蔕の先きは四個か五個に分れ、細く突き出て瓣より長いところ、誠に妙な形です。舶載草花としては培養容易で、冬期普通の温室か室内に取込めば、それで充分越年します。そうして四五月の交芽を摘んで挿せば、能く活いて早く成長致します。春秋の實蒔もまた至極容易です。

雪姫物語（中）

白柳秀湖譯

（三）魔法使ひの花園

大の仲好しであつた蝶太郎が、何處ともなく姿をかくしましたので、優しい花子は、どんなに心配して其行方を尋ねましたらう。けれども、あの、雪の降る日に、田舎行の大橇へ自分の橇を結び付けて、町外れの門の方に飛んで行つたといふ事より外には、悉しいたよりを知て居る人は只の一人もございませんでした。花子はもう悲しくて／＼毎日涙にくれて居りました。其うちに悲しい冬の日も過ぎ去りまして、またうら／＼かな春が巡つて參りました。けれども蝶太郎のたよりは少しも御座いません。花子も、とう／＼あきらめまして、『蝶さんは、死んでしまつたらうねえ』と申して嘆息をして居りますと、

『そんな事はありますまい』と、何處ともなく、さも優しい聲が聞えてまゐります。見ると、温かい春の光

が、例の箱庭の上へ映しかゝつて、ニコ／＼と笑つて居る樣に見えて居ります。そこで花子も少しは元氣がつきまして、こんどは庭の雀に『私のお友達は死んでしまつたでせうか』と申しますと、雀はいかにも樂しそうな聲をして、『私共はどうもそうは思はれませんね』と申しますので花子も、益〻氣が強くなつて參りました。『私はこれから蝶さんが見た事のなかつた、アノ新しい赤靴をはいて、河の方へ行つて、尋ねて見よう』と、花子はこう心をきめまして、ある朝、まだお婆さんが寢て居る内に、自分の床を出まして、そつとお婆さんにお別れの接吻をして、只一人、靜かに町の門を出て、ゴー／＼と流れて居る大河の方へ足をむけました。河の處まで參りまして、花子は、水の流れをつく／＼と眺めて居りましたが、やがて『お前は私の友達をあつちへ連れてつてしまつたんぢやなくつて？私はね、此大切の／＼赤靴を今お前に上げるから、どうぞ其の友達を返して下さいよ』と河に向つて頼み入りますと、折しも吹き出した春風に、ザワ／＼と河水の

上に立つた小波は、何となく花子にうなづく樣に見えたのでございます。そこで花子は、何よりも大切にして居た赤靴を惜し氣もなくぬぎ捨てゝ、水の上に浮てやりますと、水も流石に、此優しい小娘の大切の〳〵靴を、とるに忍びませんでしたのか、浮んだ靴はみる〳〵うちに岸の方へ吹きよせられました。けれども花子は一生懸命でございますから、もう少し向ふの方へ投げてやらうと思ひまして、汀一杯に生ひ茂つて居る葦の葉に、半ば隱れて居た小舟の中へ乘りまして、その靴をとり上げようと致しますと、舟は綱が結んでなかつたものか、見る〳〵うちに岸を離れて、河の眞中の方へ推流されてまゐります。花子は驚いて、岸の方に舟をよせようと氣を揉みましたが、悲しや舟はドン〳〵と、水にまかせて下流の方へ急ぎますので、花子はたまらず聲をたてゝ泣き叫びました。けれども其聲を聞いてくれるものは、岸の雀より他にはございません。雀は花子の泣き聲をきいて飛んで參りましたが、力がないのでどうする事も出來ないのです。けれども連り

に少女をなぐさめ顔に、岸に沿うてとびながら、「私共がこゝに居ますよ。私共がこゝに居ますよ」と囀つて居ます。さて靴はと申しますと、丁度舟の背後について流れて參りますが、舟とは餘程間がございますので、とる譯にも參りません。少女は、今はボンヤリと靴下のまゝで舟の眞中に座りまして、見も知らぬ、岸の景色を力なく見て行きますと、此方の岸には年經た大木がコンモリと茂り合ひ、名も知らぬ美しい草花は得意氣に咲き亂れて、影を水に映して居ます。又遙か彼方には青々とした野原が見えて、そこには、牝牛や羊がさも樂しそうに、若草を喰べて遊んで居ます。少女はフト、河が此うして私を蝶さんの處まで連れて行つてくれるのではあるまいかと思ひますと、段々氣も晴れやかになつてまゐりまして、今までとは打つて變つて、兩岸の景色を物珍らしげに眺めながら、やがて何ともいはれぬ綺麗な櫻の畑のある處に參りました。見ると向ふに一軒家がございまして、赤く青く塗つた妙な窓が見えて居ます。其家の屋根は草葺でございまして、

門の處には、木偶の兵士が二人立たせてあります。花子はこれがほんとうの兵士だと思ひましたので、大聲を上げて助けてくれと申しましたが、もとより答へる筈もございません。舟が波の爲に岸にちかくなりました時、花子は、兵士に見えたのが實は木の人形であつた事を知りましたけれども、猶聲をはり上げて、叫びました。すると、こんどは家の中から一人の老婆さんが杖にすがつて、跛を引き引き出て參りました。其老婆は、色々な草花のかいてある、奇態な帽子を被つて居るので御座いました。

『マア、可憐そうに！こんな恐ろしい河を、どうして恁んな處まで來たんだらう』と云ひながら、淺瀨に入つてまゐりまして、件の杖で少女の舟を引きよせて、岸の方に助け上げてくれました。さて花子はホッとしてやれ嬉しやと思ひますと、眼の前の老婆が何だか怖い樣な氣がして參りました。『一體おまへは何といふ名で、何しに恁んな處まで來たのかね』、老婆がまづこういつて尋ねますので、花子はこれまでのことを殘ら

ず話しまして、さてあらためて蝶太郎はこゝへは來なかつたかといふ事をたづねました。老婆は少女の話を聞いて居ましたが、エヘン／＼と二度ばかり態とらしい咳拂ひをいたしまして『そんな人は一向こゝへは來なかつたが、しかしマアそんなに氣を落すにも及ぶまい。またこゝへ來ないものでもあるまいから』と、それから自分の家の櫻實の甘い事、色々な草花の美しいことなどを、話しまして、先づ家まで來て見よというて、花子の手をとつて、自分の家へつれて參りました。老婆の家といふのは、表の方に幾つかの高い窓がありまして、其の硝子が、赤や青や黄やいろ／＼な色にぬり分けがしてございますので、日光はそれから美しく部屋の中へさし込んで參ります。テーブルの上には、さも甘そうな櫻實が澤山盛り上げてございましたが、老婆は少女に『いくらでもお上り』といつてすゝめて呉れました。少女は腹は減つて居るし、好きなものでございますから、餘念なくそれをたべて居りますと、老婆はどこからか金の櫛をもつて參りまして、背後から

花子の美しい髮を梳つてやりながら、薔薇の花のやうな其顔をヂッと見つめて、「お前のやうなかあいい少女が一人あつて、一處に居てくれたら、どんなにか、嬉しいだらうと私はもう久しい前から思つて居たのさ。お前いつまでも此處に居ておくれよ」老婆は、何でも此少女を永く此處へとめておくには、蝶太郎の事を忘れさせるに限るといふので、老婆は例のもちまへの魔法を使はうと心をきめました。此老婆といふのは、魔法を知つては居ましたけれど、それかといつて決して惡い性質の老婆ではありませんでした。

そこで老婆は急いで自分の花園へ參りまして、杖を出して、ムニャ〳〵と何やら口に呪文を稱へながら、花を撫でますと、花はすぐに地の下へ沈んでしまひまして、今は流石に廣い花園も薔薇の花だけは一輪もないことになりました。これは老婆が、此少女が薔薇の花を見るとキット蝶太郎のことや故郷のことを思ひ出して永くこゝに留らないといふ事を心配したからであります。

さてもうこれで好いと、老婆は花子を連れて、花園を見せました。マア此花園の美しさと申しましたら、どんなでせう。こゝには四季そのをり〳〵の花が一度に咲きそろひまして、話に聞く極樂世界とは、こんなものであらうかと思はれます。少女はもう嬉しくて〳〵たまりません。夕日が櫻の木蔭にかくれる時分まで、あちらこちらと、まるで蝴蝶の樣にとびまはりまして、其夜は老婆のうちの床で安らかに眠につきました。輝くやうな床の中に、紅絹の地に紫のすみれを縫うた枕をして、女王樣の婚禮の日のやうな夢を見ましたのでございます。

それからといふものは、花子はツイうか〳〵と何事も忘れまして、此花園のうちに暫くは樂しい日を送つて居ましたが、ある日のことでございました、花子は何の氣もなく老婆の帽子をとり上げて、美しく其上に描かれてゐる色々の花を見て居りましたが、其中でフト眼にとまつたのは、なつかしいかの薔薇の花でございました。老婆は、花園にあつた薔薇だけは、前もつて

魔法で地の下へ沈めておきましたが、此帽子の蕾を消しておく事はつひ忘れたのでございました。

「おや薔薇といへば、こんなに色々の花がありながら何故こゝには薔薇の花が一つもないのだらう」と花子はこう考へましたので、すぐに園へ出て隅から隅まであらためて見ましたが、さて一本も薔薇らしいものは見あたりません。花子はいろ／＼昔の事を思ひ出しまして、もうたまらなくなりましたか、地の上に膝をついて、熱い涙をハラ／＼と流して泣きましたが、こはそもいかに、花子の涙のこぼれた處は、丁度薔薇の花の封じ込められて居た處であつたものと見え、温い涙が地を潤したと思ふと、美しい薔薇が一度に現はれて、いかにも見事に咲き亂れました。少女は只もうなつかしく其花瓣に接吻しまして、故郷のことや友達のことを考へてサメ／＼と泣き出しました。

「妾はスッカリ忘れて居た。妾は蝶さんを尋ねに來たのだわねえ。お前は蝶さんの行方を知らないかね？もうほんとに死んでしまつたのかしら。」と花子は泣

く／＼花に尋ねて見るのでした。

「いゝえ、まだ死には致しません。私は今まで地の下に居ましたが、そういふ人には會ひませんでした。」花はかように答へました。

「どうも、ありがたう」と花子はそれから他の花の方へまゐりまして、一々其花瓣に蝶太郎の行くへをたづねました。けれども、どの花も／＼自分の因縁話や、身の上話よりほかには、何も知りませんので、話すことは只其ればかりなのでございました。花子はこの花園でさま／＼の草花から、それは色々な妙な話をきかされました。そのうちで、鬼百合の花の申しますには、

「マア、お聞きなさいよ。葬式の太鼓の音がするぢやございませんか。ポーン、ポーンと、いつも二つの調子で。オヽ、女の悲しそうな輓歌の歌もきこえて來ますよ。お僧さんの聲もするぢやあございませんか。茶毘の火の處に、マア可憐そうな寡婦が、眞紅な上衣を着て立つて居ますよ。遺骸は夫のですよ。アレ青い火が、青い火が。あの女の心の中こそ五體を燒

きつくされるよりも、苦しいでせうよ。茶毘の焰はアノ女の心の焰を消すことが出來ませうか』

『マア何の事だか、私にはちつとも分らないわ』と花子が申しますと、鬼百合は『いゝえ、これは私の話でございますもの』。

それから牽牛花が申しますには、

『アレあそこの狹い路のむかふに古いお城が見えてゐる。落ちかゝつた古壁には蔦蘿がしげく纏ひついて、玄關までも、蔓つて居りますよ。マアあの二階の欄干の處に居る乙女、何といふ美しい乙女でせう。今路の方を見て、連りに何かもの待ち顔ですね。あの姿といひ、あの容といひ、マア何にたとへ樣もないではありませんか。衣ずれの音がしますよ。何か申しました。何?「どうして來ないのだろう」。あゝ誰かを待つて居るのではございませんかマア』。

『もしやそれは、蝶太郎さんの事ではなくつて?』と花子が、きづかはしそうに聞きますと、『いゝえ、今のは私が見た、昨宵の夢ですよ』牽牛花は平氣なもの

でございます。

風信子は申しました。

『それは／＼美しい、やさしい三人の乙女がありましたが、一人は赤、一人は青、一人は白の衣裝をつけて、月のあかるい夜、靜かな湖の岸で、互に手に手をとつて踊つて居ました。するといづこともなく、かむばしい香が三人の乙女を誘ひまして、森の中につれて行きました。その後三ツの棺が其の森の深い茂みから滑り出まして、湖の上に浮びました。螢が、ちやうど小さな送り火の樣に、棺の上を飛んで居ります。踊つて居た三人の乙女は眠つて居るのかそれとも、死んだのか、と尋ねますと、花の馨が、三人はもう骸になつたのだと申します。夕の鐘は、悲しい調で鳴り出しました』。

『マア何といふ悲しい話だらう。妾はもうさむしくなつてしかたがない。おまへの強い馨は、其死んだといふ三人の乙女の事を思ひ出させていけないわ。それにしても蝶さんはどうしたのかねえ。ほんとに死

んだのではないかしら。薔薇はアンナにいふけれど』

花子はしみ〴〵と申しました。

『リーン　リーン』と風信子の鈴は小な音をたてゝ鳴り出しましたが、

『私は蝶太郎さんの爲に此悲しい鐘を鳴らすのではありませんよ。これが私の知つて居る只一つの歌なんですもの。蝶太郎さんの事なんか少しも知りはしませんよ』。

胡蝶花はどんな事を歌ひましたか。ヤッパリ蝶太郎の事ではありませんでした。

『春の初の日のことでした。あたゝかい日の光が初めて小い庭をてらしまして、家の白壁は美しく輝いて居りました。その壁の傍に、咲き亂れた黄色の花は、樂しい春の光をうけまして、宛然黄金色に輝いて、其美しさといつたら例へようもありません。一人の老婆が今戸口の日あたりの好い處へ長椅子を置いて腰掛けて居りますと、其孫娘らしいホントに可愛らしいのが、一寸傍へ參りました。そして其の子が、

お老婆の額に接吻しました時、私は未だアンナ美しく見えた人を見たことはございません』。

『マア私にもお老婆があるのよ。』と少女はホッと嘆息をもらしましたが、

『さぞお老婆が妾をさがして居らしつて、どんなに悲しんで居らつしやるでせう。蝶さんが居なくなつた時の樣に、あんなに心配ばかりして居らつしやるに違ひない。けども私、今にキット蝶さんを探し出して歸るから善いわ。もう花に聞いても無駄よ。花ナンテ自分の歌ばかりしきや知らないんだもの』。

こう思ひ出すとたまりません。少女は一時もこんな處にグズ〳〵して居るのがいやになりまして、そのまゝ一目散に外の方へかけ出さうと致しますと、今飛び越えた水仙の花が、少女の裾をシッカとおさへて、何かブツ〳〵申して居ります。

『それでは、おまへは何か蝶さんの事でも知つて居るの？』花子はもしやと立留りました。

『私は自分でよく知つて居ます、私は美しいでせう。

私の香は好いでせう。向ふの小い窓のある部屋に、舞踏の上手な乙女が居ります。あの乙女は片足でも立ち、また時には兩足でも立ちます。乙女の歩くのは宛然世界を股にかけて居る樣でございます。乙女は今片手で布の端を持つて、茶入れから水を注ぎかけて居ります。多分自分の胸衣を洗濯するのでございませう。「淸潔は好い事です」と云ひ乍ら、あれ〳〵眞白な着物を釘にかけて居ります。それも茶入の水で洗つて屋根で乾したものでありませう。乙女はこれ見よといはぬばかりに、其長い胴を出して半身裸體で居りますよ」。

『そんな事はもう聞きたかないのよ。』と花子も今は一生懸命やう〳〵花園の果まで走つて參りましたが、そこには、戶がシッカリと閉されて居りました。少女はやう〳〵のことでそれを押しあけまして、何處とも知らぬ野原へ走り出ました。もとよりか弱い女の子のことでございますから、暫らく走る内にスッカリ疲れてしまひまして、もう一足も進まれません。背後を振り返つて見ましたが、もう誰も追つて來る樣子も見えませんでしたから、少女はホッと路傍の石に腰を下ろしまして、四邊をよく見廻しますと、どうでございませう、何時の間にか夏も疾うに暮れてしまつて、秋もよほど深い頃のけしきではありませんか。

『マアどうして、あんな處にウカ〳〵として居たのだらう。もう秋ではないか。休むだりなんかしては居られない！』

氣を取り直して花子は、立ち上りました、けれども足はもう傷ついて痛みは頻りでございます。見渡せば、どことも知れぬ荒野の末で、病みほうけたやうな細い長い柳の葉は、黃ばんだ色の悼むが如く、うすら寒い風につれて、一葉また一葉、ハラ〳〵と散つてまゐります。實にさみしい、うすぐらい淚の出るやうな秋の夕ぐれで御座いました。

（四）お姬樣の花婿

氣はたしかでございますけれど、躰軀が疲れてもう進まれません。花子はまたも思はず知らず、路傍に腰を

下ろしまして、ホッと一呼氣つきました。見ると、自分の腰かけた前の方から、一羽の烏がピョイ〱と少女の前へやつて來まして、サモ不思議そうにヂッと顔を見守つて居ります。花子の方でも、秋の夕ぐれをこんな荒野の末に行きなやんで、人影一つ見えない時でございますから、何とは知らずなつかしく思ひましたので、ツイ其の烏に向つて、自分のこれまでの物語をくはしくしてきかせました上、さて更めて蝶太郎の行方について、心あたりはあるまいかと聞いて見ました。烏は少女の話を熱心に聞いて居りましたが、やをら口を開きまして、さも重々しく、申しますには、『そうです……事によると、あれが——そうかも知れませんね』

『エ!!!それぢやあ、お前は知つて居るの』と倒れるほど驚いた少女は、いきなり烏に飛び付いたのでございます。烏はビックリしたのしないのではございません。

『マア〱靜かにお聞きなさい。私はあれが多分あなたの探してゐる蝶太郎さんだらうと思ふんです。けれども大かた、アノお姫様の爲に、もうあなたの事

なんか忘れてしまつたでせう』と、烏はしさいらしく話しました。

『蝶さんはアノお姫様と一處に!!!』と花子が驚くのを、烏はまづ〱と押靜めて、それからの物語。

『此國に一人のお姫様がございます。それは〱御怜悧な方でございまして、世界中の新聞紙を、毎日スッカリ讀んでおしまいになるのです。けれど、妙な事には、それをまたスッカリ忘れておしまひなさるのです。ツイ先達てのことでした、お姫様はいつもの通り、音樂室へ行つて歌をお唱ひになりましたが、其歌のうちに「何故私には、夫がないのか」といふ意味の一句がございました。お姫様はそれを口のなかでくり返して何か考へて居らしつたが、やがて多くの御侍女をお呼び集めになりまして、御婚婚の御相談がありました。御侍女は一同口を揃へまして、それは至極よろしい事でございますと御應へを致しましたが、中には「とうから其事を思ひまして、實は内々で御心配申して居りました」などゝ云ふもの

もありました』。花子は、烏がまはらぬ口を動かして熱心に話したてる擧動の面白さにニコ〱と笑ひながら聞いて居ります。けれど烏はます〱眞面目でございます。

『いゝえ決して笑談ではございませんよ。實は私の仲好しも、お姫樣の御殿へ御奉公に上つて居りますから、それでスツカリくはしく聞いたのでございます。サアそれから、お姫樣のお言付で翌日の新聞紙には、皆其事に就ての廣告が掲げてあります。それには此う書いてあるのです。誰でも標致の好い男は御殿の中へ入つて好い。そしてお姫樣と話をして見て、其男が、御殿の中でも、自分の家と同樣に、大い聲で、おめずおくせず話の出來る人であるならば、直ぐお姫樣の婿樣にしようといふのでございます。サアそう致しますと、集りました、集りました。我と思ふ男たちは先を爭うてお城へ出てまゐりましたが、さて一日目と二日目には、雲の樣な大群の中に、誰一人お姫樣のお氣に入るものがありませんでした。そ

れは、どの男も町に居ります時分には、隨分よく大聲で話すことが出來る人でも、お城へ入つて、銀色の甲冑をつけた警固の兵士や、階段に立つて居る金色の衣服を着た役人を見ますと、もう氣が小くなつてしまつて、いよ〱お姫樣の前へ出て一口でも其さやかな聲がかゝりますと、お答へ處か皆畏れ入つて縮み上つてしまうのでございました』。

『其人達の中に蝶さんが居たといふんだね』と花子はいかにももどかしさう、烏はまた大へん落付いたものでございます。

『マ、靜かにお聞きなさい。それから三日目の事でございます。かなり大きい男の子が、馬も車も何にもなしでお城へやつて參りました。其の目は宛然あなたのやうに黑い可愛らしいのでございました。髪の毛は長い房々とした美しいのでありました。けれども、衣服はたいへん貧棒らしうございました』。

『ア、蝶さんよ。それがホントの蝶さんよ。うれしい。うれしい。とう〱蝶さんが見付かつたんだ』

と、花子は手を拍つて雀躍して喜びました。
「其子は背に小いカバンをかけて居りましたよ」と烏が申しますと、花子は、
「なあに。それは蝶さんの橇なんだよ。蝶さんは橇に乘つたまゝ行つてしまつたんだもの」。
「それは、そうであつたかも知れません。私もハッキリ見たといふ譯ではありませんからね。それから其子は少しも怖れる色なく、ドン〳〵御殿の奥へ入つて行きまして、お姫様の前に立ちました。其時お姫様のまはりには、立派な貴女が雲の様に多勢とりまいて居、其貴女にはまた一々美しい侍女が付いて居る外に、華々しく制服を着飾つた護衛の騎兵は、また一々其小姓を從へてズラリと列んで居る、其尊さ、其美しさ。實に云ひようのない程でございました」。
「蝶さんは、それでお姫様のお婿さんになれ ましたの」。
と花子は何だか心配そうに尋ねます。
「ア、殘念な事でございます。若し私が烏でございま

せんでしたら、キットお姫様のお氣に入つて見せたのでございましたものを。其子といふのが、それは實に賢い子で、宛然私の樣に、上手にお姫様の前で話が出來たので、お姫様を始め、雲の様に居並んで居た御侍臣は一時にアッとばかり感心してしまつたのでございます。其子はすぐにお姫様のお氣に入つて………」。
「それが蝶さんに違ひないよ。だつて蝶さんはホントに怜悧なんだもの。蝶さんは學校に行つてた時も、いつも九々なんか皆な暗記してしまつて居たわ。早く其お城といふのへ私を連れて行つて下さいよ」花子はもう氣が氣でありません。けれども烏は首を曲げて、
「それは、私の仲好しも、お城の中に務めて居りますから、お易い御用では御座いますけれど、貴女の樣な、少い可愛らしい女が御殿へ入るといふ事は、容易に出來ますまいよ」といひましたが、花子が、たつて烏に頼みますので、烏もそれでは今一寸行つて仲好

しに相談して來ませうと、お城の方をさして飛んで行きました。
稍暫らくたちましして、烏は少女の待つて居た處へ歸つて參りました。
『今行つて來ましたよ。これは私の仲好しから、貴女に上げて呉れといつて、よこしたのです』と、花子の前へ出したのは、御殿の臺處から持つて來た一片のパンでございました。花子は丁度お腹がすいて〳〵たまらない處でしたから、烏の許婚の親切を幾度かお禮を言ひながらそれを貰つて食べました。
『花子さん、今聞いて見ましたがね、お城は嚴重でございまして、とても表門からは入ることは出來ませんけれど、私の仲好しが、裏のぬけ道を知つて居りますから、そこから貴女を御案内申して、殿樣の御部屋にお連れ申すといつて居ります。部屋の鍵は彼女がよく知つて居るそうでございます』。
少女は烏に連れられまして、夕闇の中を大きな煉瓦街を通つて、宮殿の裏庭の方へ參りました。サラ〳〵と

風に散る木の葉を踏んで、扱門の處まで來て見ますと、兼て約束のあつたものと見えまして戸が半分ばかり開けてあります。少女の心は、心配とうれしさで只胸の動悸ばかりはげしく、色々な事を考へましては、流石に乙女の、暫らくは入りかねて躊躇して居りました。
『黒みがちなパツチリした眼ざしといひ、房々した髪と云ひ、どうしても蝶さんに違ひない』と、今少女の目には、蝶太郎が薔薇の花の下で、自分を見てニツコリとした其の面影があり〳〵と現はれて、これから蝶太郎と巡り合つたら、蝶太郎が自分の長いつらい物語をきいて、どんなに喜ぶだらうか等と思ひめぐらしますと、嬉いやら怖ろしいやら、花子の心は、もう沸へかへるやうでございます。烏に導かれるまに〳〵こは〳〵小い部屋に入つて行きますと、そこにはかはいいランプがともつて居り、其中央に烏の許婚といふのが居りまして、花子を見ると大變親切に迎へてくれました。それから此烏の案内で、少女はランプを持つて後に付き、御殿の奥をさして參りましたが、人々はもう

寢靜つたか、長い廊下は寂寞として、誰にも行き合ひません。花子は何だか自分の跡について來るものがある樣な氣がしまして、フト振りかへつて見ますと、ランプの光のボンヤリと映つた壁の上へ、駿馬に跨つて獵に出て行く立派な人たちやら、色々な勇ましい象が、淡い影繪の樣に現はれて居ります。少女はギヨツとして烏に此事を聞きますと、あれは、此部屋〳〵に寢て居る人の夢が映つて見えるのだと敎へて與れました。奥へ進むにつれて部屋はいよ〳〵壯麗なものになつて參り、通る部屋も通る部屋も、皆薔薇や百合の花の彫刻が、目もさめる樣でございます。

やがて少女は此侍女に導かれまして、お姫樣のお寢室へ來ました。其の壯嚴、華麗なこと、之までのものとは比べものにもなりません。中央に二ツの寢床がございまして、黄金で莖を作らえた百合の花が飾つてあります。白い花のはお姫樣の床で、紅のが若殿樣のでございました。花子はもう何もかも忘れて仕舞ひまして、紅百合の間からソツと寢顔を覗きますと、まづ其の房

〳〵とした黒髮が見えて居ります。少女はヤレ嬉しやと、すぐに呼び起しました。若殿はヤオラ眼をさまして床の中から首を上げましたが、こはそも如何に、何たる輕卒でございましたらう。蝶太郎とは全く別人の、見たこともない人でございました。此騒ぎにお姫樣も眼をさまして、白百合の花の中から始終の樣子を見て居られたのでございます。花子はもうガツカリ致しまして、自分が他人の寢室へ忍び込んだ大それた罪人であることも忘れてしまひ、之までの物語をのこらず若殿とお姫樣との前でうちあけてしまひました。

「マア、可憐そうに!!!」と、お姫樣も殿樣も殊のほか感にうたれた樣子でございました。烏はひどく罰せられるに違ひないと、恐れ入つて居りましたが、それすら只一應後來を誡しめられたばかりで、反つて御褒美の沙汰となりました。一體、此女烏は御殿の臺處掛りでございましたが、お姫樣は、今度此少女に親切を盡した御褒美として暇を出して自由の身にしてやらうか、それとも上の役目にとりたてゝやらうかとの仰せでし

た。烏は厚く御禮を申し上げまして、ヤハリ此のまゝ宮中に勤めさせて頂きたいと願ひました。

此時若殿樣は御自分の床を起き出でて、疲れた花子をそこへ寢かして下さいました。花子はもう夢の樣、只ありがた涙にくれて、いつしか其夜は思ひ寢の夢に入りました。只見る、けふの旅で行きあひました人も動物も、見る〳〵天使の姿となつて小さな橇を曳いて參りましたが、其中には蝶太郎が乘つて居まして、今花子を見てなつかしそうに、うなづいて見せましたと思ふと、夢は破れて、もういつしか夜は明けて居ります。

花子が起きますと、お姫樣と若殿は下へも置かずもてなして下さいます。山海の珍味を集めた御馳走、見たこともない奇麗な着物、少女は頭から足の先まで絹ものづくめにせられました。お姫樣は、タッテ五六日滯在して面白い話をして呉れと申されますけれど、少女は大望ある身の先を急ぐからと無理に辭退を致しまして、どうぞ一生の御願ひには、これから何處とも知れぬ荒野の果までも尋ねて行かなければなりませんから

靴を一足と、小い車に馬を付けて戴きたいと申上げますと、お姫樣は快くそれを御聽き取りになりまして、只少女の願つたものばかりでなく、猶色々の下され物がございました。いよ〳〵お別れといふ時に、お姫樣夫婦は、いかめしい護衛を澤山つれて、お城の門まで送つて下され、花子が馬車へ乘る時には、お姫樣が手をとつて乘せて下すつて、色々と行く先の注意までして下さいました。かの侍女烏は戶口に立つて羽ばたきして見送つてくれるし、其夫の烏まで、さも殘り惜し氣に馬車について三里も送つて呉れました。其馬車の中には勿論、甘しい菓子や果物が澤山入れてあるのです。『さよなら、御機嫌よう』と姫君夫婦は親切に言つて下さいます。花子はワッと泣き伏しました。

三里先の松原で見送りの烏に別れ、花子は寂しくも一人旅に上りました。烏は梢の上に高くとまりまして、少女の馬車が遠い〳〵あちらに見えなくなつてしまふまで、黑い羽をバタ〳〵させて、かなしい聲を擧て居ます。花子の悲さは、皆さんどんなでございましたらう!?

◯の讀者より

▲家庭雜誌の趣味　賣るとの上手な家庭の雜誌は實に多い。大家の名を列記したのも亦尠くない。されども眞心に誠を包んだものは一つもない。其間に立つて吾が「家庭雜誌」は比較的少數の讀者を有して淸新な趣味を鼓吹して居る。僕は僕の同僚や友人が「日本の家庭」が實行にどうの、やれ何々の云々が面白いの、などゝ論らふのを聞く度に一種のあはれみの情が起つて、なぜ吾が「家庭雜誌」の趣味が分らぬのかと笑止になる。何うか此雜誌が、先生等の生活を豐かとまでは行かぬとしても支へるとの出來るだけに成長してほしいと切に祈つて止まないのであります（三河平坂町、市川久四郎氏）

△記者申す。小さな「家庭雜誌」が世間の立派な同業者のと肩を並べ得やうとは思ひも寄らぬとですけれど、みすぼらしいのはみすぼらしいので、矢張又何等か特色のあるものにとは絶えず吾々の希望して居る所であります。

▲「醜惡なる家庭」　を讀みまして知らず識らず涙を催しました。深尾さん感謝致します。まだ一面の識らなき身のぶしつけ、さぞ御蔑み下さいませうけれど私は餘り深き感に打たれて無智をもかへりみず一言申さない譯にまゐりません。深尾さん世の中は實に暗黑です。罪に滿ち穢れに充ちてゐますけれども私は天然の美といふ美しい慰籍者があり、又あなた方の如き世の婦女子の爲めに斯くまでに活動して下さる人の中には最も大なる美しき愛を持つて居て下さることを知りました。私は結婚といふことに就いては幾度となく悶へ苦しみました。仰の通り親の權力で子の意志を曲げさせる親達は少なくありませぬ。どうぞ其無理なる結婚に强いられて苦悶しつゝある多くの少女の爲めに此後とも力となつて彼等を其束縛から救ひ出して下さいませ。切に切にお願ひ致します（あ、て、子氏）

△記者申す。何といふお氣の毒な御境遇でせう。これから思つてもホントに世間にはどの位ゐ悲慘な事が隱れてゐるかも知れません。人道のため自由のため私共も更に筆硯を磨し不法な道德や習慣と戰ひませう。しかしながら婦人問題解決運動の中心は矢張婦人自身でなければなりませぬ。失禮ながらあなたの樣な教育のある方が此運動の爲めに一生を献げて下すつたらと私は切に祈つて居るのです。これについては目下東京に於ける婦人運動者として今井歌子氏、遠藤淸子氏、幸德千代子氏、堺爲子氏等一團の婦人が活動しつゝある樣を御注意なさるやうお勸め致します。

▲死んでしまひました　私が此頃耳にした一事件を記者諸兄の御許までお話申して見たい。否な天下一般の人に知らせたく思ひます。それは結婚問題ですが——處は我國の西部です。或基督教會の執事である男が或婦人と結婚することになつた。勿論基督教的儀式を用ひるので、其式場も會堂と定めて愈々婚禮の當日となつた。馬鹿々々しい事には花嫁と花婿とは此日初めて相見たのであつた。ところが其の婦人といふのが不幸にも十人並以下の容貌だつたので、夫たるべき人から俄かに異議を唱へ出して此の結婚を破談にしやうとした。併し周圍から干涉があつて——耶蘇教信者として甚だ不都合だといふ樣な意味の非難が一番有力な抗議となつて——其破談を打消して兎に角首尾よく式を擧げて終つた。（婦人の兩親は信者では無かつたので一時大へんに怒つたとか）、ところで此の奇なる夫婦は一家の中に住む事となりましたけれど、婦人は一度拒絶された時から表情深く刻まれたものがあつて、鬱々たる胸底の蟠りは次第に其の精神を害し盡し、あはれ遂に自殺を遂げました。あゝ無殘や死んでしまひました。私は婦人が拒まれた時に於て斷然たる所置の出來なかつたのを少なからず遺憾に思ふのであります（京都、遠藤友志郎氏）

●新刊紹介

▲早稲田文學　島村抱月君が新に歐洲留學より歸つたを機として、名も懐かしき早稲田文學が再興せられた。殊に百八十頁の大册、第一號の卷頭は抱月君の四十五頁の大論文といふので、大分世間はおどされた樣だ。島が、「業報」は例の早稲田一流の穩健で、有益でもあらう、便利でもあらうが、其代り別に味のある程でもない。其他の材料も餘りドットしたものがない。殊に短篇小說の如きは、一號の春雨のも、二號の眉山のも、凡の又凡、殆んど見るに足らぬ。是には少々張合拔がせざるを得ぬ。吾人は固より抱月君の後來と早稲田文學の將來とに多くの望を屬するもの、願はくば今一段の精を加へよ。（一部廿五錢、京橋區五郎兵衛町文淵堂）

▲藝苑　是は上田敏君の手に成る新雜誌、早稲田文學の尨大に比して淸楚の趣き人を動す所がある。島崎藤村、馬場胡蝶などの名も見えて居る。短篇小說の反譯物に面白さうなのもあるが、まだ讀まぬ。第一號の卷頭なる藤村の「朝飯」だけ讀んだ。或人がまだ朝飯も食はぬといふ物貰男に對し、人は勞働すべきものだ、十錢やるから是で尺八を買つて其節を賣れと勸めて、金と助言と二つ惠みをしたと喜んだが、跡で聞けば其男は直に一ぜんめしやに入つたといふ話。ちよつと諷刺の味がある。然し第二號の評論文の中に、此短篇を審めて「兎にかく近來注意すべき小品で……「破戒」の先驅として文壇に警鐘を傳ふるに足る」とあるのを見ては、吾人實に呆然たらざるを得ぬ。文壇といふ處には實に幽かな警鐘があるものだ。是ではお姫樣が一里といふ遠道をお歩きなされたのをビックリ仰天して御褒め申す樣なものぢや無いか。（一部十五錢、銀座三丁目佐久良書房）

△小品文學　是も今年一月より新に出た雜誌。編輯者は澤田斬雲君。若し眞に善く「小品」の粹を發揮し得るならば、一雜誌として存立の價値は確かに在る。斬雲君の「時文」は中々讀みごたへがある。殊に其の社會主義的思想を含有して意氣昂然たる所、文壇一方の將たる器量を示して居る。（一部十五錢、京橋和泉町泰山堂）

▲詩集わか草（樋口配天著）　配天君の詩は極めて自然なり、極めて平易なり、極めて流暢なり。世の朦朧體、晦澁體、ハイカラ體に似ず。故に吾人は常に喜んで君の詩を誦す。見本一篇を左に示す。（卅錢、本郷眞砂町平民書房）

川邊に垂るゝ　糸柳
今日は　昨日に　色　増して
降る雨毎に　青けれど
嫗の袖の　あせしかな」
柳の糸は　染せれども
身に降りかゝる　春の雨
今年は　去年に　いやまして
霜の髯の　白きかな」

●春の料理

割烹學校創立者　石井泰次郎

◎水菜の酒煮

（原料）　水菜（京菜ともいふ）一かぶ余、酒八勺、醬油八勺、砂糖三十匁

水菜をよく洗ひ一寸位に切り、酒にてよく煮、醬油、みりん、砂糖を入れて味を付け、皿に盛る。

●英文社會主義書類販賣

今後本社にて英文社會主義書類の販賣を爲さんと欲し先づ試みに左の數種を取寄せたり、續々御注文を乞ふ。（郵稅は本社にて負擔す）

Capital(Marx)……………………4,00円
Woman(Bebel)……………………,50
Communist Manifesto(Marx&Engels)…,20
War of the Classes(Jack London)……,50
Evolution of Man(Bölsche)…………1,00
Socialism(Liebknecht)………………,20
Easy Lesson in Socialism(Leffingwell)…,10
Wage Labor & Capital(Marx)…………,10
The Trust Question(Vail)……………,10
Why I am a Socialist(Herron)…………,10
Socialist Songs…………………………,10

尙は本社へ御出であらば現品御覽に供すべし。

販賣所　東京市麹町區元園町一ノ廿七　由分社

irasii onna no ko to 6 sai ni nar Kiyochan to iu yasasii otoko no ko toga arimasita. Kono hutari wa makoto ni naka no yoi tomodati de arimasita. Arutoki Kiyochan ga Miichan ni iu no niwa 'komban anata no tokoro e tomari ni yuk kara amado no kagi o kakez ni oite kudasai' to itte nao yakusok o tagaenu sirusi ni tote ume no hana o Miichan ni agemashita. Miichan wa taisô uresikute sono yo wa amado no kagi o kakez ni okâsan to issyo ni nete Kiyochan ga mô kur jibun da to matte imasita. Kiyochan wa yoi jibun o kangaete Miichan no uti e ikimasite amado o ton ton to tataita keredo Miichan wa akete kuremasen desita. Sorede Kiyochan wa 'hana o okaesi nasai' to okorimasita. Sono toki Miichan wa utino naka kara 'mama naranu haha-oya no hutokoro des' to iimasita"

Kotira de wa kono yôna otogibanasi ga okonawarete ir tono koto des. Kiita mama o ome ne kakemas.

[Kisya iw—Kôiw fû no tôsyo wa taihen omosyiroi to omoimas. Omosyiroi tôsyo nara donata no demo yorokonde nosemas. Syikasy tszuri wa jûbun ki o tskete kudasai.]

Rondon (*London*) wa Dokoni aru.

[Rômaji dai 5 gô kara—
YAMAGATA ISOH.]

Kyōshi ga gakkō de chirigaku wo oshiyete iru uchi ni, hitori no seito ga wakimi wo shite oru no wo mitsukete: "Tarōsan Rondon (*London*) wa doko ni arimasu? to no toi wo kaketa. Tarō kotayete: "86 peiji ni arimasu."

Tszurikata ni Tsuite.

FKAO SHÔ.

Dai 1 gô no rômaji ran ni bok no rômaji tszurikata o kaite oita ga sono uci de "haccak" o "hakkak" to yonda hito ga ar. Are wa "c" no ji o ima made no "ch" to onaji ni yom no da kara mkasy no kakikata ni sureba "hatchaku" de ar.

チ no on o nartake cikak arawasô to sur niwa "tsyi" ga iciban yoi to omow. "Chi" de arawas nado to wa rambô fhô mo hanahadasyii. "C" no ji wa igilis-go de wa "s" ka "k" no on o arawas ni suginai de, ikani "h" ni tetsdawasetatte "tsy" no on ga der haz ga nai. Tada kari ni ateta ateji de ar. Konna iikagen na ateji o tskaw krai nara musyiro sore yorimo zutto kantan de sosyite rikts ni kanatta "c" no ji o motte aratani チ no on o arawasaser ga yoi. Kore ga bok no "ca, ci cu, ce, co" o tskaw riyû de arimas.

Mata hoka no hito ga "sha, shi, shu, she sho" to kak tokoro o bok wa "sya, syi, syu, sye, syo" to kak. Kore mo ôini riyû no ar koto da ga, toritsmande iw to, syokun tamesyini "s-h-a" o cûisyite hatsonsyite mi tamae. Kitto "sa" no yô ni natte syimaw. Tsgini "s-y-a" o itte mi tamae. "S-ya," dôsyitemo "sya" ni nar. Kore ga bok no "sya..." o totta omona riyû de ar. "y" o kaita hô ga yomi yok mo ari, hoka no "kya, nya, mya, hya, rya, pya, gya, bya" nado ga kotogotok "y" de ar no o mireba naosara "sya, syi, syu, sye syo" to kakanakereba naranai de wa nai ka?

RÔMAJI RAN

Rōmaji no Tegami.

SAKAI TOSHIHIKO.

Konogoro Dokusha-Shokun no uchi yori Rōmaji no Tegamiga choicho' kimas. Jitswa yominikukte isasaka Heikō mo simasga, mata hanahada yukai demo arimas. Dōka kono Fūo sakanni site, otagaini Rōmaji no Renshūo sitai to omoimas. Tadasi Sasiataritewa, amari nagai monoo Rōmajide kakanu yōni, mata Machigai no okoriyaski mono, tatoeba Zenkin no Haraikomi mosikba Shoseki no Chūmon no gotokiwa, narbek koremade no Monji de meihakni kak yōni site itadakitai.

Syiki no kaze.

FKAO SYÔ.

Gembun-icci no uta wa mada Nippon niwa kanzen na mono ga dekite inai. Bok wa gembun-icci no syinja na dake ni, dôkasyite kore o yatte mitai to omotte ita. Kondo rômaji o kaite mir yô ni natta no de naosara gembun-icci no uta ga hosyik natta. Keredomo "Rômaji" zassyi ni sura omou yô na no ga nai. Dôka syite tamesyite mitai to iw ki ga gaman ga syikirenak natta. Ê mamayo! hito o matter koto wa nai. Jibun de hitots yatte miyô! to, kô omotta sue, deki mo syinai kse ni hitomane o syite, maz *National Reader* no 3 ni ar "*How The Wind Blows*" to iw no o yakusyite mita. Amari kangaer jikan ga nakatta no de jibun nagara ammari hidoi to wa omow keredo tomokak mono wa tamesyi da to rikts o tskete okmen mo nak koko ni hirôsur. Kore ni tsuite, donata kara demo oosyie o itadak koto ga dekireba mokke no saiwai des.

* * *

Fuk yo har-kaze!
Takak, hikuk.
Otoko no kotaci ga kosaeta tako o
Sora no acira ni agete wa orosyi,
Cîsai onna no ko no bôsyi oba
Kyû ni tskande, hittakutte,
Kaze ni nagasyita osage no kami o
Nagete, nabutte, motsuresaser.

* * *

Fuk yo natsu no kaze!
Takak, hikuk.
Matte asob ka sonô no hana to?
Ksa wa ko-midori, kogane no iro ni
Min'r kokmots fuki-nabikasyite,
Kotori kawaiya sono su no naka de
Nemre, watasyi ga yusutte yar to,
Eda o watatte fku natsu no kaze,
Mado nya kosame o furi-kakaraser.

* * *

Fuk yo aki-kaze!
Takak, hikuk.
Hana mo kocô mo odorokasarete
Its ka kono yo ni sugata o kakus.
Kare-ha wa jimen ni manji to midare,
Kozue wa samge ni furuete ir.
Bara-bara ki no mi o makicirasyite
Namida o sasow aki no hi-kure.

* * *

Fuk yo fuyu no kaze!
Takak, hikuk.
Kbo-ci o yuki to mizore ni umete
Koyama wa hitonade, gin no sekai.
"Osam, kosam" to kobasyiri asyi ni
Gakkô kodomo o sekasyite oite,
Sam-Kaze fuk yo fue no syirabe,
Syinnen o iwaw uta ni awasete.

Mujaki nar Kodomo.

Tosa, Aki-gôri, Tano-mura.
GESHI TAKATOSHI

"Miichan to iu 5 sai ni nar kawa-

●由分社より

△先づ「婦人新論」の發行の遲れた事を御詫いたします。著者の身に色々忙がしい事があつたのですから、今に於て脱稿が出來ませぬが、三月早々には必ず書きあげて、直ちに印刷に着手し、四月一日には發賣の筈であります。

△「失業者問題」も疾くに發行の筈でありましたが、是は「社會主義研究」の中に其一部を書く事にしましたので、單行本として出す事は見合せました。

△「社會主義研究」は必ず三月十五日に第一號を發行します。詳細は廣告欄にて御承知を乞ふ。

△「眞人の自白」及「火の柱」は今後金尾文淵堂にて發賣する事になりました。其外、元の平民社の出版物の中、版權を他に移した者が數種あります。それらも廣告欄にて宜しく御承知を乞ふ。

△本社も今後いろ〳〵出版の計畫をして居りますが、何を云うても素人の事で、到底思ふ樣には行きませぬ。然し、我々に特有なる主義と趣味とに於ては、如何なる大書林とも競爭する事が出來ます。只だ此の一つを賴みにして、我々の事業は成立つて居るのであります。

△然し、我々の事業は、常に同志諸君の助力を借るに非ざれば、決して其の目的を遂ぐる事は出來ませぬ。願はくば諸君「家庭雜誌」の新購讀者を作りて、此の微力なる我々を助けたまへ。

△又、二月にて前金切となりたる讀者諸君七十餘名の中、過半は既に次の前金御拂込み下されたれど、未だ御送附に接せざる分が猶は數十名あります。是は何卒、至急に御拂込下さるやう、偏に願上げます。

家庭雜誌 第四卷第一號 一月一日發行 目次

家庭雜誌 第四卷第二號 二月一日發行 目次

次號の豫定記事

本誌代價	
一部	金十錢
六ヶ月前金	五十五錢
一ヶ年前金	壹圓
（何れも郵稅共）	

廣告料	
特別一頁	十圓
普通一頁	七圓

▲本誌は每月一回（一日）發行とす。

▲代價は小爲替を以てお送り下さい。郵券代用ならば五厘切手で一割增に願ひます。

▲御注文の時は必ず何卷何號より何號まで何册の前金と明瞭に御記載を願ひます。

▲御手紙には必ず住所姓名をハツキリとお書き下さい。又御轉居の際は新舊の宿所を併せて御通知を乞ふ。

▲本誌は前金でなくては一切御註文に應じませぬ。前金の切れた時には帶封に「前金切」と朱印を捺して上げますから御注意下さい。

▲歐米諸國よりの御注文は別に一册に付二錢づゝの郵稅を申受けます。

明治三十九年二月廿六日印刷
明治三十九年三月一日發行

東京市麹町區元園町一丁目廿七番地
發行兼編輯人 堺利彥

東京市京橋區日吉町十番地
印刷人 中村彌助

發行所 東京市麹町區元園町一丁目廿七番地 由分社

大賣捌所 東

五冊前金七十錢〇十冊前金一圓三十錢（郵税共）

明治卅九年三月十五日發行　價十五錢

堺利彦編輯

社會主義研究

第一號

THE STUDY OF SOCIALISM

MARCH 15, 1906.—No. 1.

* * *

"In every historical epoch, the prevailing mode of economic production and exchange, and the social organisation necessarily following from it, form the basis upon which is built up, and from which alone can be explained, the political and intellectual history of that epoch."

— KARL MARX.

* * *

要目

△吾黨運動の機關としては既に「光」の在るあり。本誌の目的は、斯主義の理論、歴史、運動等につき、稍や精細深邃なる智識を供給せんとするに在り。

△本誌の體裁は正に此の廣告に同じ。雜誌店の店頭に立つ者は、萬國社會黨の旗幟たる鮮血色の表紙に依りて、直ちに本誌を見出すを得べし。

發賣所　東京市麹町區元園町一丁目二十七番地　由分社

由分社發行書籍目錄

（十錢以下の御注文には別に郵稅二錢を要す）

社會主義神髓（幸德秋水氏著）價二十錢
社會民主黨建設者ラサール（幸德秋水氏著）價十五錢
革命婦人（平民社同人編）價十二錢
百年後の新社會（堺利彦抄譯）價五錢
理想鄉（堺利彦抄譯）價五錢
通俗社會主義（堺利彦譯述）價二錢
少年叢書 目のある人（堺利彦著）價十錢
婦人新論（堺利彦著）價五十錢
社會主義小話《近刊》
社會主義の詩《近刊》
小供の社會主義《近刊》
社會主義の話（深尾韶著）發賣禁止 價一錢
月刊 社會主義研究（堺利彦編輯）價十五錢
家庭雜誌合本（第二卷）價五十錢
家庭雜誌合本（第三卷）價八十錢

由分社取次販賣書籍目錄

（十錢以下の御注文には別に郵稅二錢を要す）

社會主義入門（平民社同人編）價十錢
經濟進化論（田添鐵二氏著）價十五錢
富の壓制（西川光二郎氏著）價十錢
土地國有論（西川光二郎氏著）價十錢
消費組合の話（石川三四郎氏著）價十二錢
地上の理想國 瑞西（安部磯雄氏著）價十五錢
英國勞働界の偉人 バアンス（西川光二郎氏著）價五錢
普通撰擧の話（西川光二郎氏著）價 錢
廿世紀の怪物 帝國主義（幸德秋水氏著）價廿五錢
小說 火の柱（木下尚江氏著）價卅五錢
小說 良人の自白 上中下全三册（木下尚江氏著）價壹圓
小說 勞働問題（堺利彦譯）價卅五錢
家庭の新風味（堺利彦著）價壹圓
家庭夜話（堺利彦編）價壹圓
枯川隨筆（堺利彦著）價二十錢
言文一致 普通文（堺利彦著）價廿五錢
小品文集 半生の墓（堺利彦著）價卅五錢
千頭小品 智識と趣味（斯波貞吉氏編）價卅五錢
少年少女 新遊戲集（西村渚山氏著）價廿五錢
社會主義名士肖像 畫葉書（一組六枚）價十錢
詩集 わか草（樋口龍天著氏）價三十錢
社會主義概評（島田三郎著氏）價三十錢
社會黨（西川光二郎著氏）價二十錢
トルストイ翁 日露戰爭論（平民社譯）價八錢

取次所 東京市麹町區元園町一丁目 由分社

光

社會主義中央機關

▲毎月二回、五日、二十日、發行
▲二十部前金六十五錢、郵稅不要
▲西川光次郎、山口義三等之を經營す

第七號目次（二月廿日發行）

● 露國革命の爲めに世界的大示威運動を行へ……萬國社會黨本部
● 山路愛山兄に與ふ……堺利彦
● 桑港より……幸德秋水
● 足尾發狂の記……西川光次郎、山口義三
● 現世地獄（鎌ヶ淵紡績會社の殘酷）……岡起雲
● 不親切の客……天生
● 東京市中の失業者……記者

發行所 東京市麹町區元園町一丁目 由分社



腦病 靜靖丸 頭痛

腦力を明快にし腦病神經病を全治す

腦病 にて常に頭重く、記憶弱力く、忍耐力薄く、氣鬱ぎ、不眠、頭痛を煩ふ人

神經 症にて僅の事を苦慮し、常に動悸、息ぎれを感じ怒り易く、悲み易く、心弱き人

逆上 症にて常に顔紅く、頭痛、眩暈し、耳鳴目かすみ、肩凝り背重く、便通少なき人

頭痛 症にて學生の常に煩ふ勉學性頭痛、感冒、徹夜、苦慮等より發する者其他總ての頭痛及び頭痛持の人

不眠 神經家又は老人等の夜分安眠を得ざる人、亦は苦慮、悲痛、等にて眠むられざる人

其他常に腦を勞する人及神經家亦は大酒家、肥滿家は持藥として此藥を服用せらるべし腦力を强健にし精神を快活ならしめ、中風、卒中風を豫防する希有の偉効あり、

藥價 三日分弱金拾錢　廿二日分（常備用）金壹圓　十日分金五拾錢
六日分金三拾錢　四日分金貳拾錢

本舗 東京市日本橋區藥研堀町　藥劑師　高木與八郎

逆上を引下げ睡眠を催し頭痛を即治す

印刷所　東京市京橋區日吉町十番地　近藤商店